北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可　昭和十六年八月十五日印刷納本
昭和十六年九月一日發行（毎月一回一日發行）第二十八號



現地編輯

THE NORTH CHINA

9
3



華北交通自動車の運行——河北省桃園附近

Means of Transportation -- Old and New

曠原横斷 一

自動車と牛車

牛車や駱駝に代つて貨物自動車が現れた時、例へば張家口と庫倫を結ぶ外蒙貿易ルートに於て一千キロの草原横斷日數は三十五日から五日間に短縮され、貿易額はその反對に三、四千萬圓から一億三、四千萬圓に飛躍した。

牛の歩みは時速約三粁で一日二五キロから三〇キロ、駱駝は一日四〇乃至五〇キロ、自動車の經濟時速を三五キロと計算しても一日三〇〇キロ以上を走るのは容易である。生産經濟の發達、支那經濟の立直しには交通の改善が不可缺だと言はれる。事變以來北支自動車路は日進月歩の發展を續け、今や一萬三千キロに達し、鐵道の新建設は八百キロを超えてゐる。

塩運びの牛車隊——内蒙古ダブスノール



曠原横斷 二

Means of Transportation -- Old and New



轎車は鐵道やバスの通らない奥地の重要な交通機關である

汽車と轎車

支那には三億五千から五億の間と推定される人口がある。その少くとも八割以上は農民であり、またその農民の少からぬ部分が土地を持たない貧農である。しかも農村の商品生産が進んでゐないので、海岸や鐵道に近い山東の農民ですら現金收入は一年を通じて三〇圓程度の者が多い。だから現金は極度に節約される。自動車が村を走つても汽車が近くに開通してもこれを利用し得るものは極めて尠ない。大部分はやはり數日の泊を重ねて作物を荷馬車で運ぶのであり、數ケ月の日數を費しては家畜を遙々連れて來るのである。勞働力は剩つてゐても働いて金を得る方法がない。だから彼等は時間の浪費は平氣である。——だが最近、急行列車を利用した渡滿團體の苦力の或る者は汽車賃より高い勞銀つまり時間の尊さを始めて知つたと語つたと言ふ。

北京東便門外を走る列車



Callisthenics for Health and Self-Culture

大地を踏んで



次の時代とその交通を擔ふにたる人物を養成するため華北交通が經營してゐる扶輪學校の生徒たち――京漢線長辛店



新しい中國の母となるべき新民會
女子部の颯爽たるところ——北京

好朋友

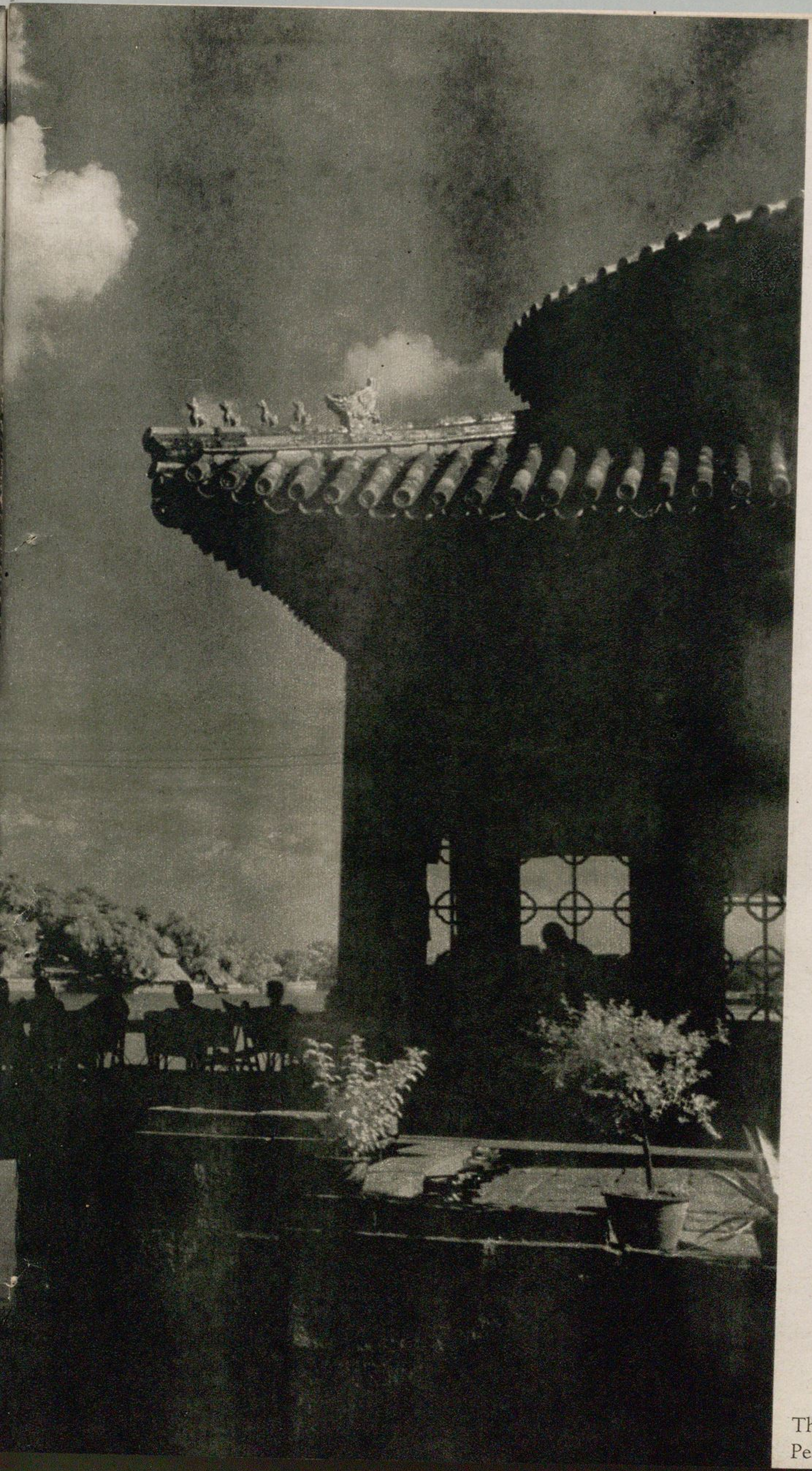




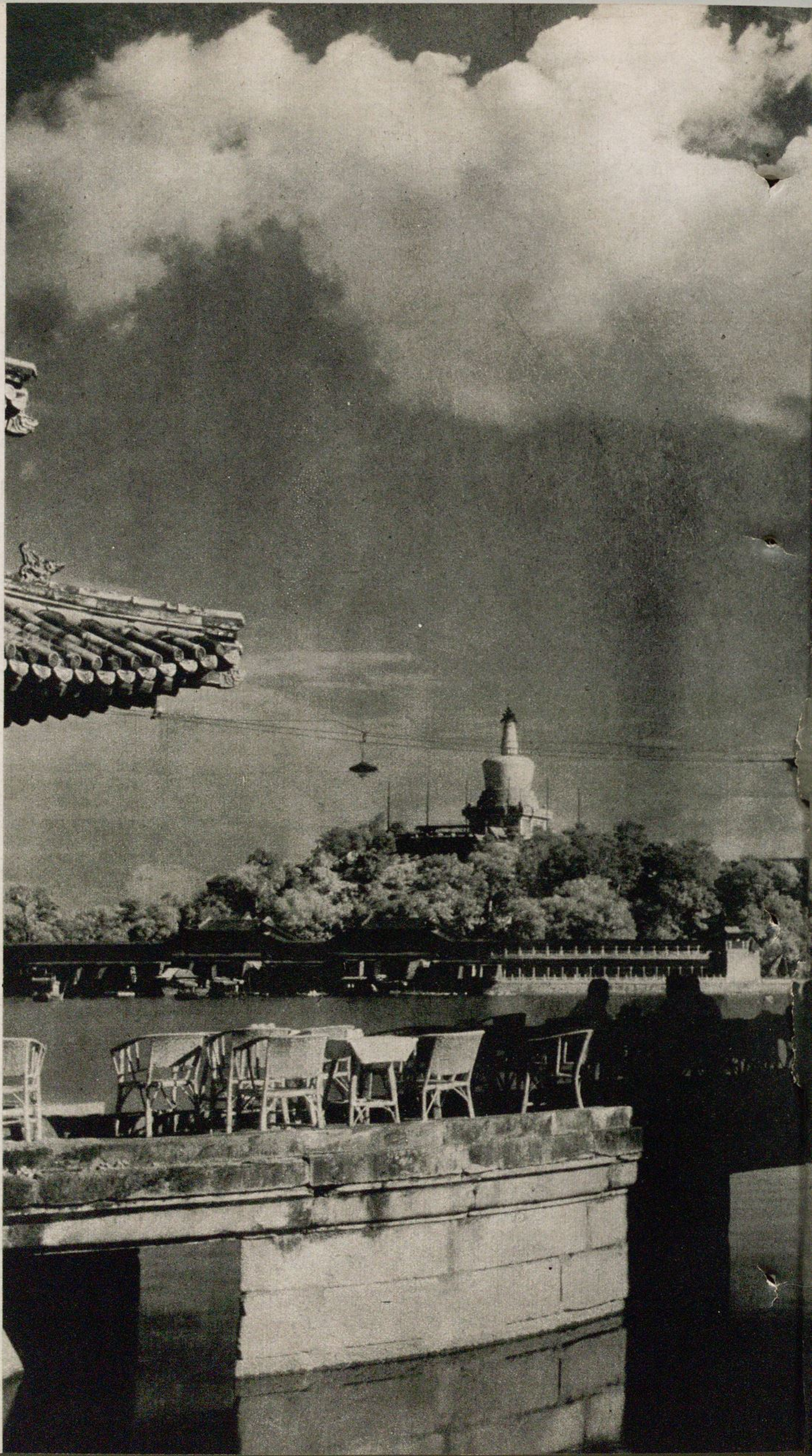
好朋友(ハオポンユウ)

きれいに手を洗つてから、ごはんをいたゞきませう。自分のことは自分で片づけませう、共同のものは大切にしませう……と、支那の子供に對して日本人の眞劍な努力がなされてゐる。

慣習は尊ぶべきもの、殊に支那人の場合は下手なことはできないと拱手傍觀を主張する人もある。しかしその慣習も時代と共に變るものであるし、またわるいところは相手がそれを好まなくとも改めさせねばならないのだ。歐米人の支那における文化活動は長い歴史と大きな勢力をもつてゐるが從來日本の手でなされたものは殆どなかつた。今のところまだ萌芽的ではあるが日本人の手によつてかやうな仕事がなされ初めたことは注目すべきであらう。寫眞は、友の會北京生活學校託兒所の「好朋友(ハオポンユウ)の集り」



The White Pagoda,
Peking



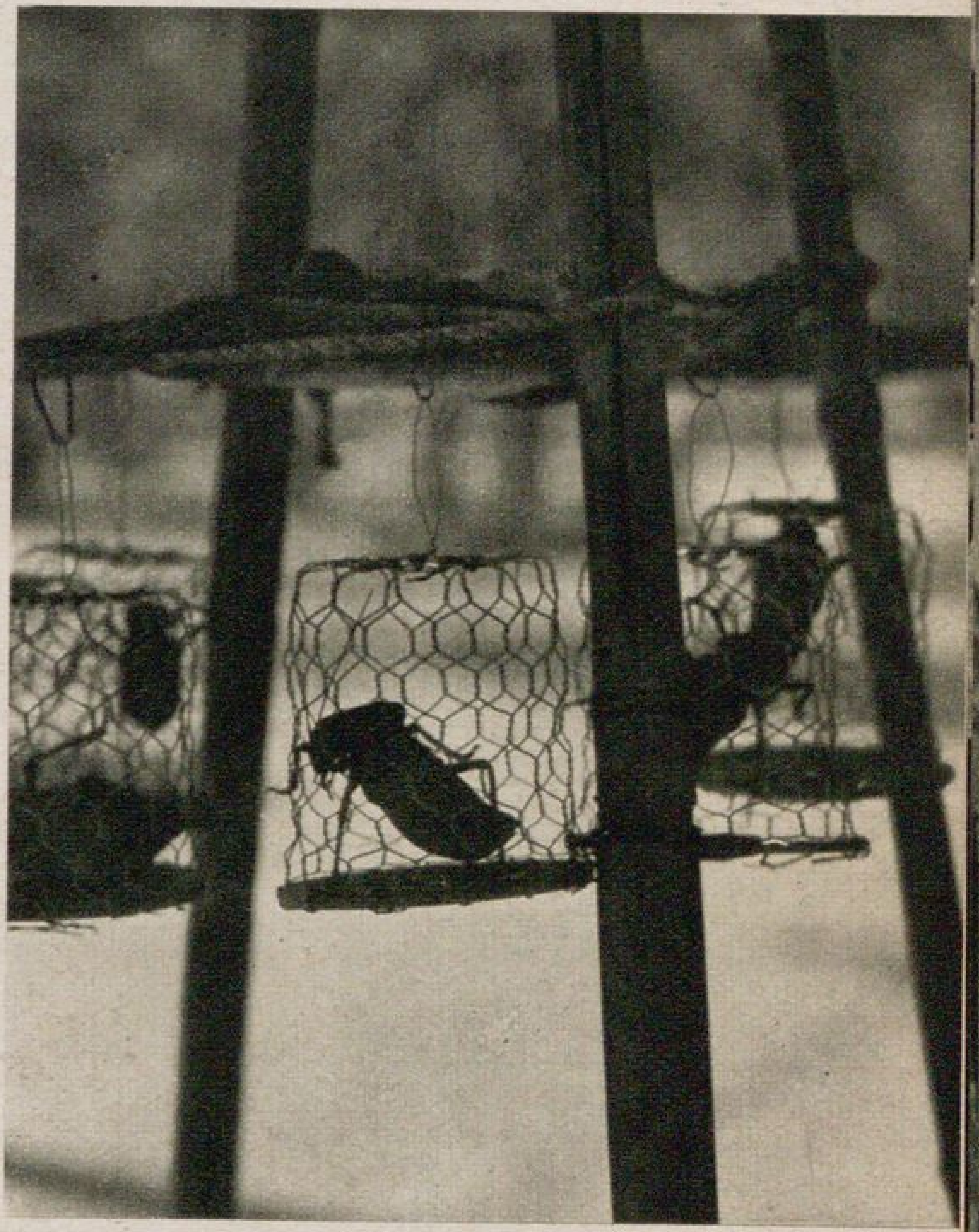
白塔遠望・北京北海公園五龍亭より



この籠は實物大、泥柳の枝でつくる



身長一寸三、四分



まん中のが今頻りに鳴いてゐる



籠に入れて一匹十五錢位

山蛯虎

これは日本でいふ、ぼてぎすの類であるが、長さ一寸三・四分もあつて動作は頗る鈍い、體は暗褐色、雌は殊に肥大で强靱な產卵管を持ち、翅は殆んど認められない、ジーと油蟬のやうに單調に鳴く。朝鮮の北部から滿蒙を經て、北支に亙り廣く分布してゐる。

その支那名の山蛯虎といふ字が示す如く、いかにも豪怪な感じである。吾々日本人のい、い、い、きりぎりすの愛らしい思ひ出から一寸緣遠いやうな氣がする。けれども支那人達はこれがなかなか風流なのかも知れない。

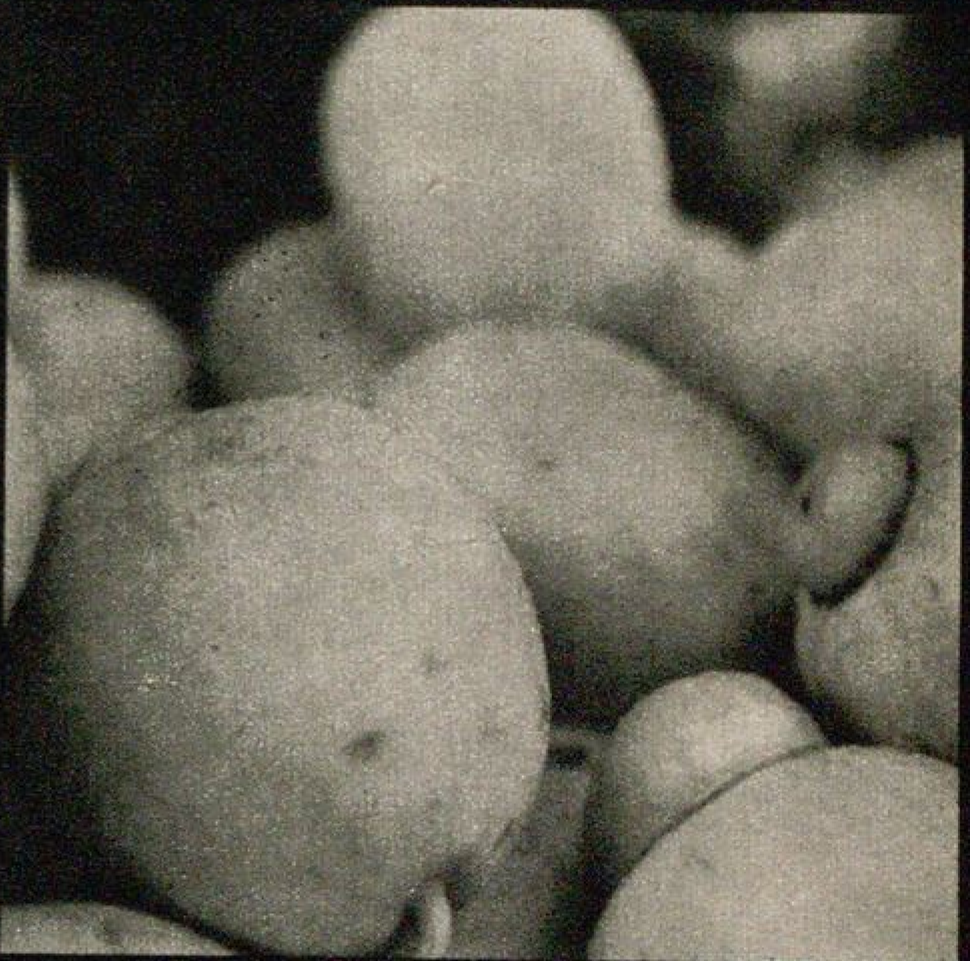
北京王府井にて



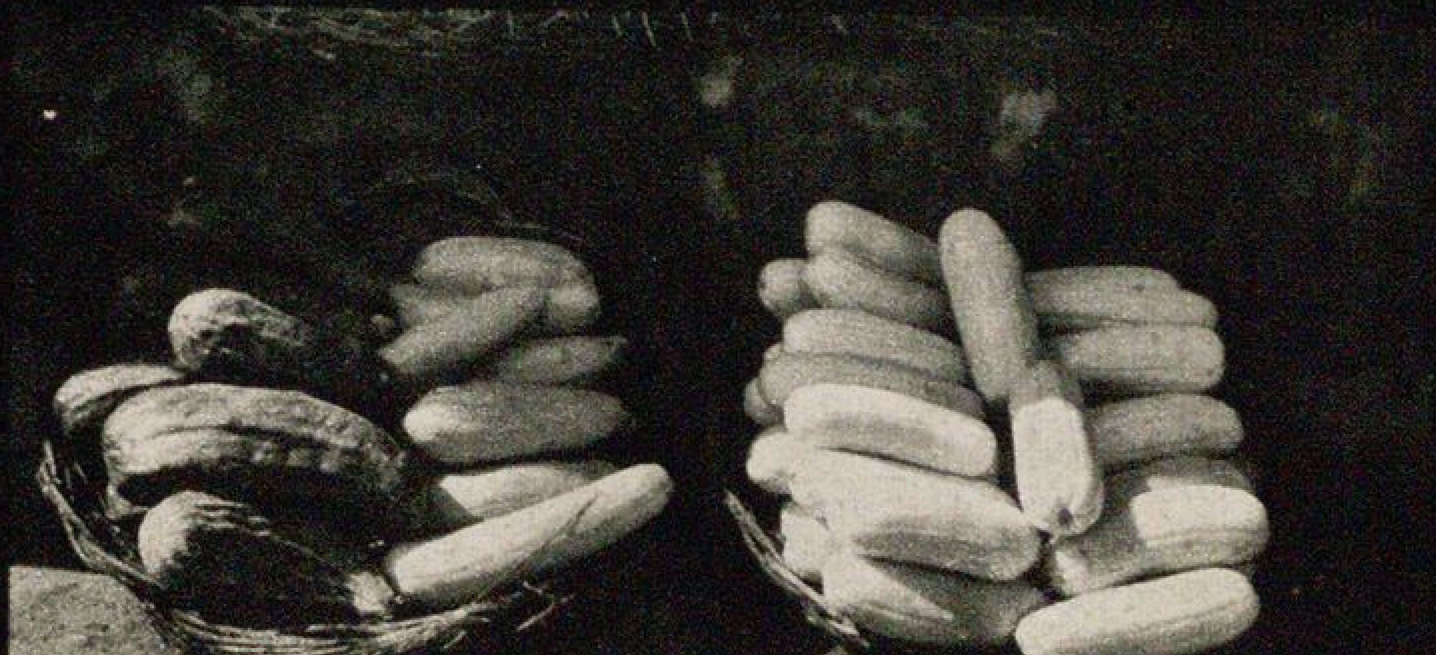
北支のくだもの



甜瓜は、メロンのやうにお座敷などで食べる柄のものではない。炎暑の下に汗して働く人達が、路傍や野良でよごれた手に鷲づかんで、皮ごと嚙ぢりつくところにその眞價が味へる。立ちどころに三、四個を平らげる彼等には濃厚なる味を必要としない。從つて支那の甜瓜はメロンのやうに高い香りもなければ甘味もない。むしろ舌ざはりがよくて水氣が多くて安價であればいいのである。支那の甜瓜は、所詮は風流人の領分ではない。





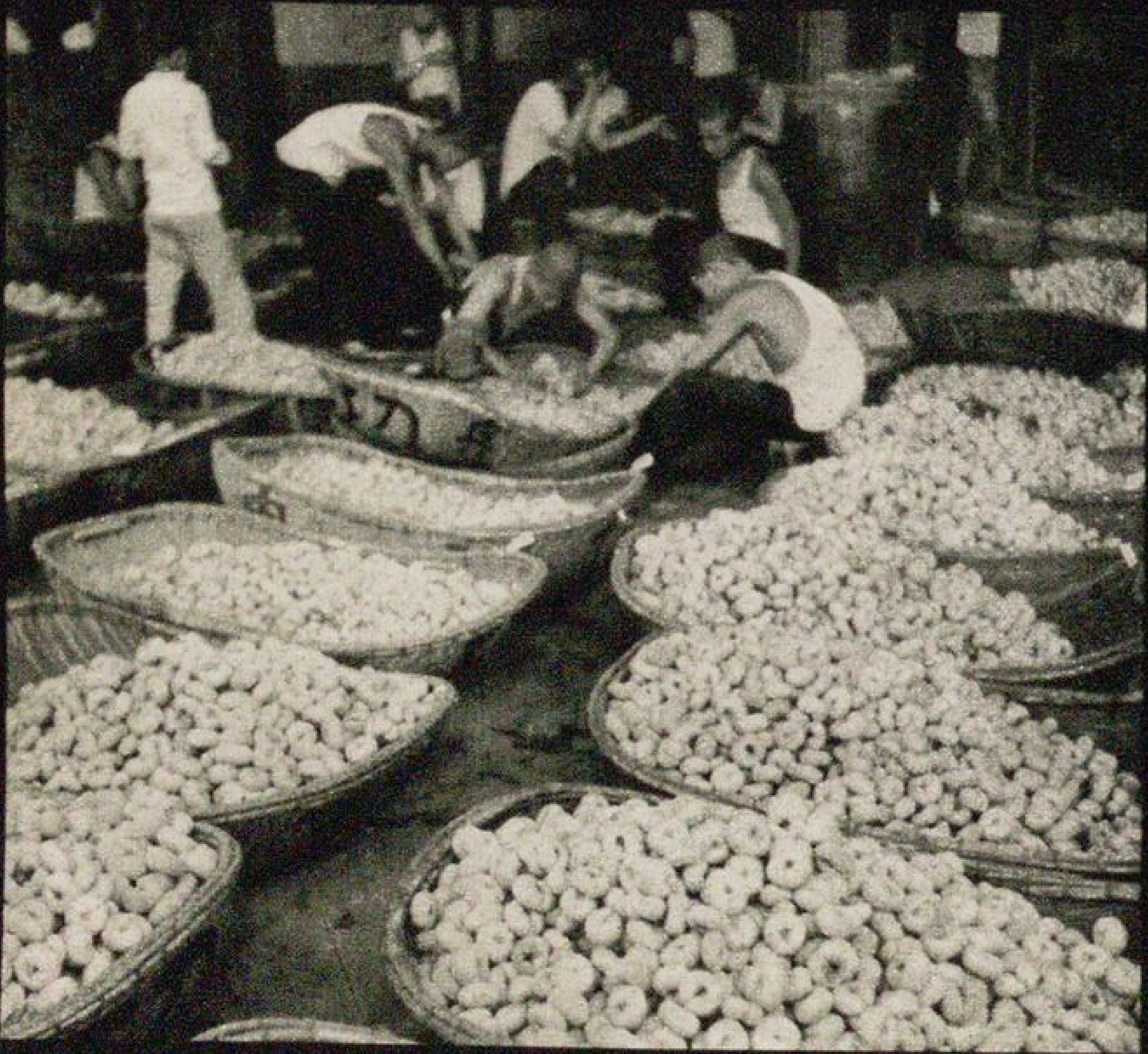




西瓜は、甜瓜と同じ眞夏の果菜ではあるが、甜瓜に比べると値段が高く、甜瓜のやうにさうたやすく貧乏ものの口には這入らない。山東の青州、河北の德州などでは立派なものが出來るが、これを日本の改良された西瓜に比べると、大味で品質が劣る。しかしかうした見方は、日本人の主觀的な味覺からいふことで、或は支那人からいへば、やはり支那土産の西瓜がおいしいのかもしれない。



桃は、北支の原產だけあつて、至る處に有名な產地がある。とりわけ肥城の桃、青州の蜜桃、深州の桃、天津近傍の水蜜桃、昌黎地方の白桃は廣く世に知られてゐる。ここに揭げる桃は、支那語では扁桃といひ、早熟であることと、形が扁平なので珍重されてゐる、味は淡白である。



Melons. Water-melons and some other Fruits





大同炭の輸送

大同炭の露出部



石炭を

Japan to help forge
of Sino-Japanese amity

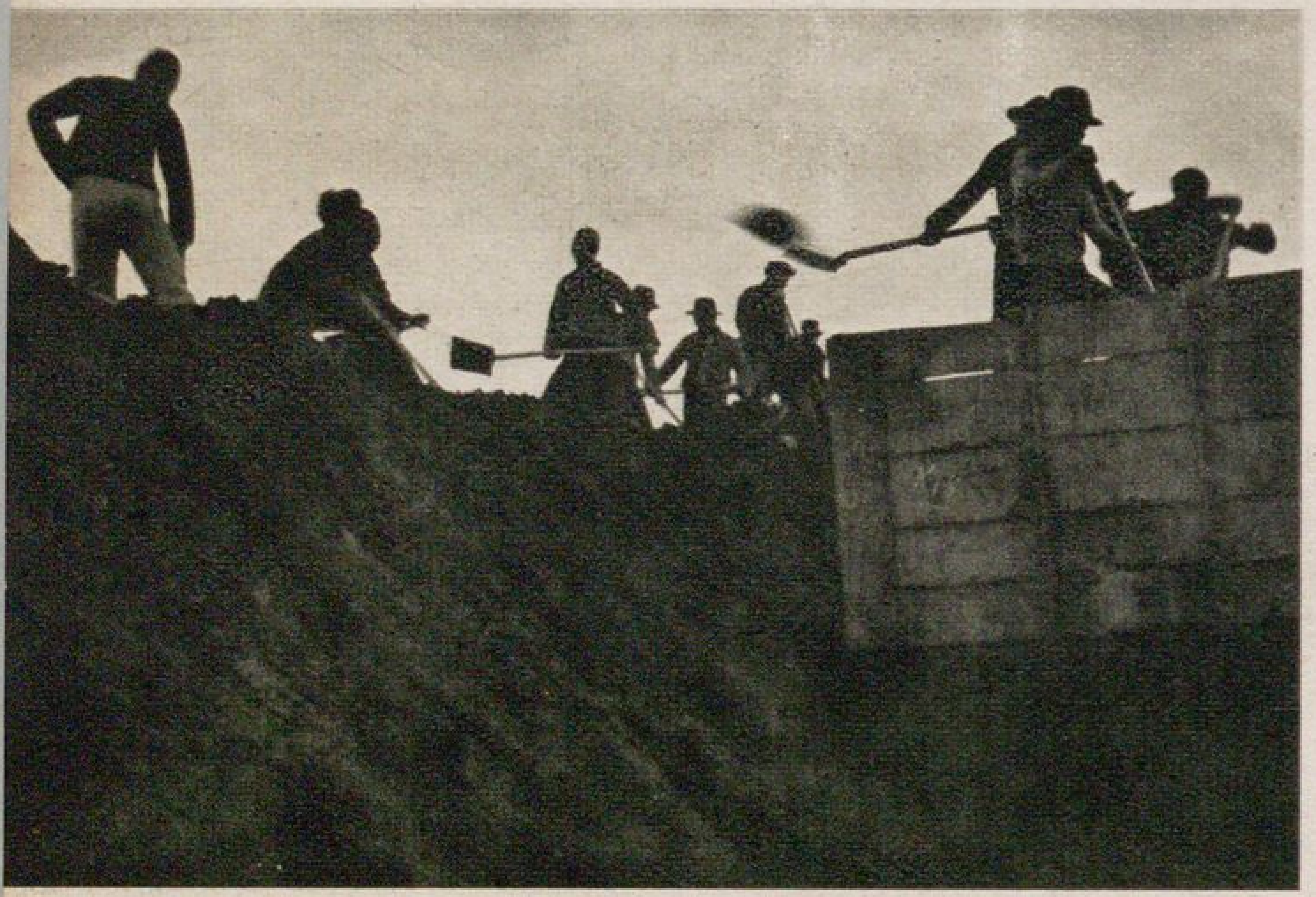
北支蒙疆には一千數百億噸の埋藏量が推定されてゐる。年生産は一千四百萬噸程度。厖大な日滿支經濟建設の進捗は更に劃期的増産を要求してゐる。だから増産額は專ら日本向輸出に當てられるのである。開灤のやうに海岸に近い炭礦は別として北支炭の埋藏量は

井陘、六河溝、柳泉、中興、大汶口、滋縣、焦作等、內陸炭田の開發が急速に進められてゐる。炭礦側の増産に對應した鐵道の建設も進んでゐる。包頭—石拐子の大青山開發線、井陘その他、山西炭の輸送强化の石德線、博山—八陡、口泉—永定莊、東太平



船に積んで日本へ





コールドリルで發破孔を穿つ



日本へ

Coal, On its Way to
the links

槪して山西を中心に奥地に集中されてゐるので陸上輸送の鐵道が絶對に必要とされるのである。炭礦と鐵道と港灣と日本の工業地帶とが緊密に結ばれてゐなければ增產の步調が揃はない。事變以來蒙疆に於ける大同、下花園、大青山、山西に於ける陽泉、壽陽、その他

——赤柴、柳泉——柳泉炭礦等北支蒙疆交通の綜合的運營に當つてゐる華北交通會社では石炭の增送を主眼とする以上の新線を建設したほか、更に大同炭の大量輸送に備へた一大運炭線と幾多の炭礦開發線の新設に努めてゐる。





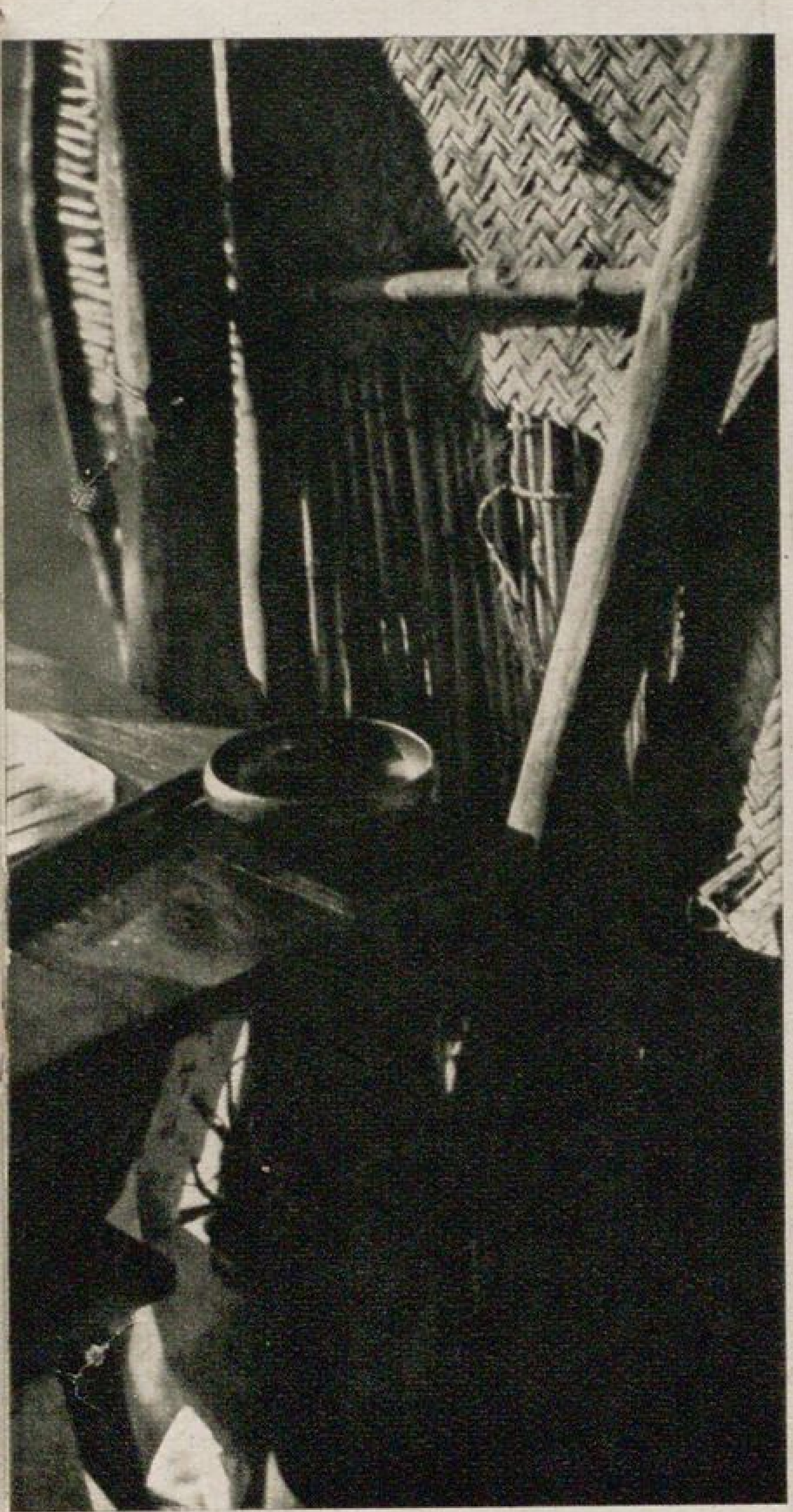
學校から歸つて——兄さんは日本の繪本に見入つてゐる

油炸鬼と油炸餅

油炸鬼は油炸檜とも書き、本誌後部の讀物の頁にそのいはれを紹介してある。油炸餅と共に中國では最も大衆的な路傍の食べもので、日本の豆腐屋の油揚にちよつと塩をしたやうな、飽き



一つ五錢、穴に葦の葉を通して下げるやうにしてくれる

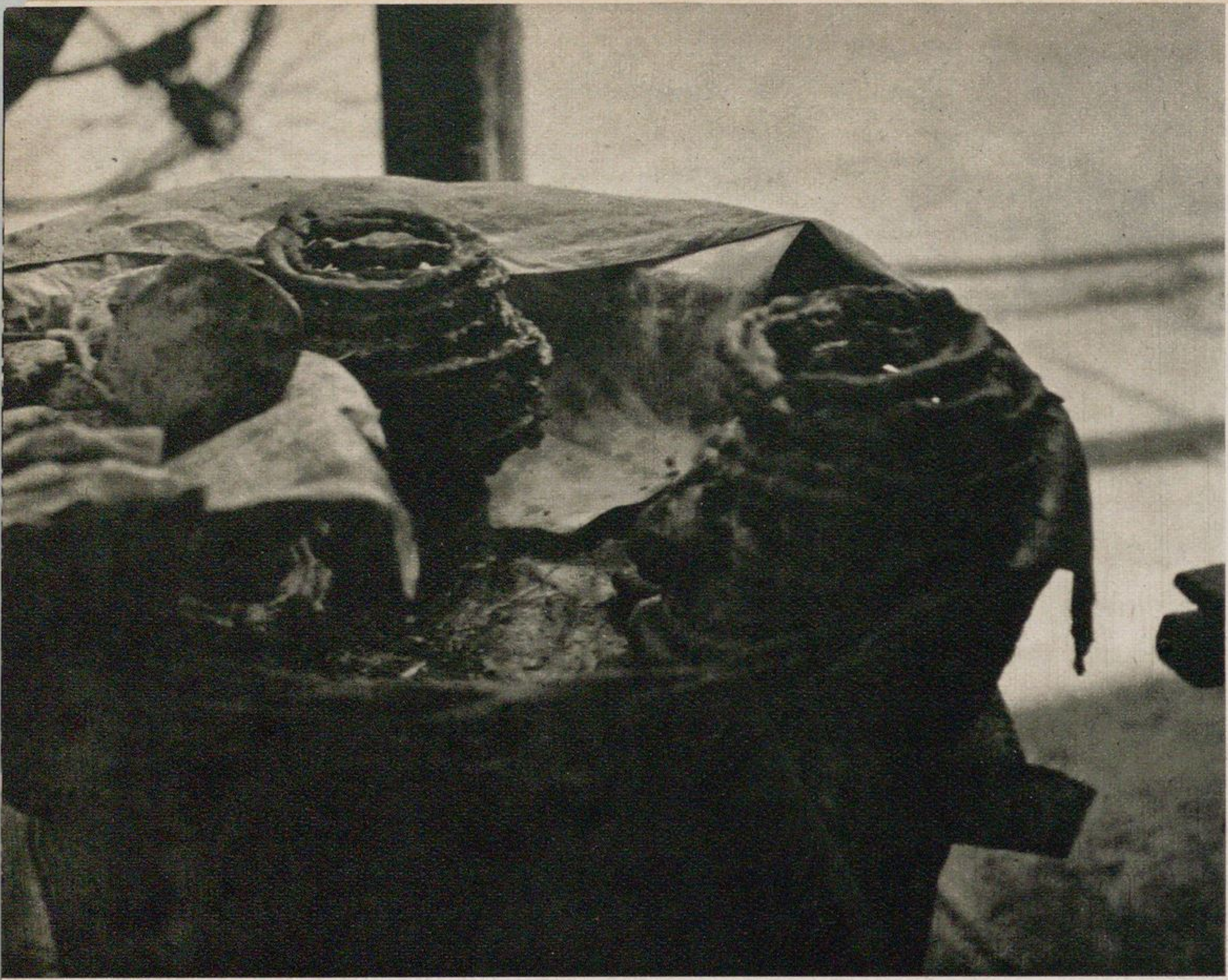




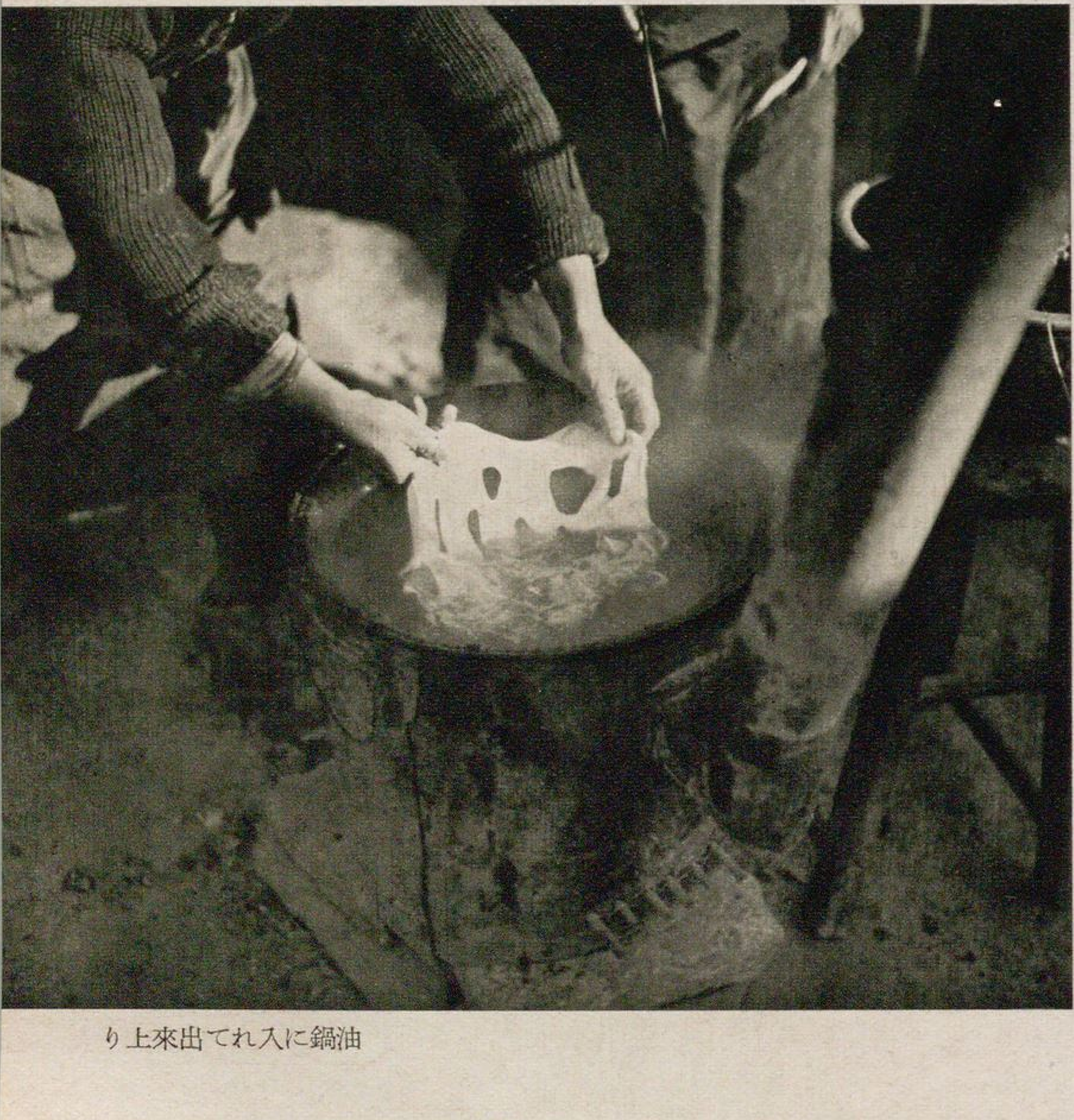
原料は塩味のついたメリケン粉、延し棒でよく延ばす

のこないものである。近來は日本人の間にもなかなか普及してゐるらしい。

油炸鬼も油炸餅もその造り方は全然同一で、ただ形狀が異ふだけである。



味も分量もかるい



油鍋に入れて出來上り



延びたら筋をつける

愛路自動車來了

華北交通會社では鐵道五千九百キロに愛路列車を運行し、沿線住民に多大の恩惠を與へてゐるが、一萬三千キロの自動車路線にもこの愛路自動車が運行されてゐる。

愛路自動車には塩、砂糖、メリケン粉等安くて良い商品が滿載してあり、又施藥施療の無料設備、その他演藝、映畫、レコードなどで樂しく一日を過させる趣向が凝らしてある。まづ自動車が村につくとこの日二里、三里、遠くは十餘里の田舍から驅せ集つて來た村民達に對して懇切な愛路の話がなされ、又先進地愛路村の狀況及産業開發に對する諸種の研究事項を發表し、優良種子の配付及家畜改良等に對する將來の計畫が話される。それがすむと、いろとりどりの餘興が始まり、一方では廉賣店を開いて押すな押すなの盛況を見せる。日常物資に乏しい奥地のことであり、しかも絶對間違ひない品物が天津や北京の相場なのだから、彼等は財布の底をはたいて奪合ひで買つて行くのだ。華北に鐵道や自動車が出現して以來かやうに眞に民衆のための慰安が行はれるのはこれら華北交通會社の愛路列車、愛路自動車が始めてである。

Here comes the Welfare Bus of the North China Railway Company.

愛路自動車來了！誘ひ合して近郷近在總出の盛況





いちばん喜ばれるのが施療と施藥、生れて初めての嬉しさだ



街に出ても買へない廉さと良さ、日用品が飛ぶやうに捌ける

開封の繁塔

開封には二基の著名な塔がある。一が鐵塔で城内にあり、他は繁塔と呼ばれ城外に建つ。鐵塔は恰もすくすくと成長する筍の樣な感じのする建築だが繁塔はずんぐりと横肥つて、遠くから望むと、スマートではない。

鐵塔とは煉瓦の釉藥が鐵色をしてゐるところから附された名だが、繁塔も矢張り俗名である。然しこの方は地名から附けられ形の特色を示す名稱ではない。即ち塔のある場所が繁臺と呼ばれたので、繁臺塔と呼び、それを略して繁塔と稱するに至つたものである。

開封の停車場から東南に向つて行くこと數丁。塔は珍らしくも六角形だ。そして唯だ三層のみである。從つて遠くから見ると不恰好なのである。然し元來は恐らくその上に更に數層あつた筈で、嘗てはすぐれた形を示してゐたであらう。塔の表面の煉瓦には佛像が現はされ、緣部に當つては唐草模樣なども使用してゐる。南と北とに入口があり、南を入ると中側の兩壁に石刻の經文を嵌し、北から入ると階段があり、めぐつて塔に登ることが出來る。塔頂から眺望は仲々よい。昔、開封が天子の都であつた頃は羅城と云つて現在の城壁の外にもう一つの城があつた。だから往時はこの塔なども城內に位置した譯である。

ものの書に依ると、五代の周の時ここに天清寺と云ふ寺があつた。北宋の初め、太平興國二年そこに塔を營み興慈塔と呼んだ。元末兵燹にかかつて寺塔倶に廢した。明初重建されたが、その際塔の上部を削りとつた爲、今のやうな形となつたのであると傳へられて居る。



The Tower at Kaifeng



唐時代女性の服裝



舞衣を着た時の髪の形



帔子（上衣）を着た時の髪の形

Milady's Dresses during the Tang Dynasty



右は胡服、帔子は紫色、同色の下着に刺繡が施されてゐる。左は常衣、上衣は淡紅色、襟は紫色刺繡入、下着は淡紫色に刺繡入、上品である

舞衣

唐代の宴會には音樂と舞は必ずつきものであつた。歌妓のみでなく大官も皇女も宮女もこれらの素養のないものはなかつた。又そればかりでなく男女の合舞も行はれてゐたと云はれる。

新唐書の安樂公主傳に「武攸暨與太平公主偶舞爲帝壽雜戲」の句がある。又士大夫の家には各〻歌姫が抱へられその士大夫の資格によつて歌姫の數も違つてゐた。舞衣には色々のものがあるが教坊記によると「開元十一年聚詩樂の作曲された時には歌姫に五色の衣を與へて舞はしめた」とある。又唐語林舊制には天覽の舞ひには必ず新曲が作られ、その日には數百人の女達が玉や翡翠などをちりばめた絹衣をまとひ、又播皇獻の曲を舞ふものは高い冠をつけ、四角な靴を履き、廣い帶を締め、衣裳の曲には幡節といふ舞具を手に持つて、羽毛の衣服を着て舞つた。丁度その樣は雲中を飄々として飛ぶ鶴の勢であつた」とある。又崔令親の教坊記には左の語がある。「開元年中作曲された聚詩樂の舞衣のオクミに鳥巢の形を縫ひ付け、その上に薄い絹の上衣をまとつた。最初の舞ひには上衣をとつて脇に抱へて出場する。舞女を見るものは忽然として現はれる鳥巢の縫ひ付を見て驚かないものはなかつた」

胡服

中國で胡服の用ひられ始めたのは唐時代からではなく、夢溪筆談に據れば「中國の衣冠は北齊（今から約千五百年前）以來胡服を取入れた」とある。



舞衣、上部は淡桃色、襟と袖の端は紫色、帯と襟には淡紫色の刺繡が施してある



常服の上に帔子を着た姿

「唐代の婦女子は新奇を好んだ爲各種の胡服を用ひたのである。胡服の形式は今の洋服のチョツキや洋服の外套に似たもので折襟が多く使用された。唐書の五行志に「天寶初年、貴族及士民は好んで胡服、胡帽を着用した」とある。

帔子（袖の無い上衣）

唐代の婦女は、好んで帔子を使用した。その形は、現代に用ひられる婦女用の小外套に似てゐる。

髻

唐朝の婦女は多く高髻を好んだ。その形は宮廷內の模倣であつて、王涯は宮詞の中に左の如く述べてゐる。「一東の高髻は綠雲の樣な輝きを持ち、宮內の樣式の樣に淡く輕やかである。宮外の婦女達は九天公主（唐の皇女）の化粧を眞似る者が多い」

唐の會要三十一卷に「高祖が秘書監の令狐棻に問ふに、何故に男子の冠と婦女の髻は高くて大きいのがよろこばれるのであらうか」と云ふ語句がある。又同じく會要の中に高祖は左の如く述べてゐる。「婦人は高い髻をよろこぶばかりでなく、濃いお化粧と、眉や額を廣く剃る。風俗上まことによろしくない、平常の儀式についても過度の費用と金銀を以て裝飾する。是非とも禁止せねばならない」又唐の詩人陸龜蒙の詩に「古來の風氣は日々にすたれつつあり化粧の用式もまことに煩雜となつた。城內の婦女の間には一尺の高髻が流行してゐる。妾ばかりが高髻を結つてゐるのではない」と歌つてゐる。

現代女性の服裝

How the Women in Modern China dress themselves



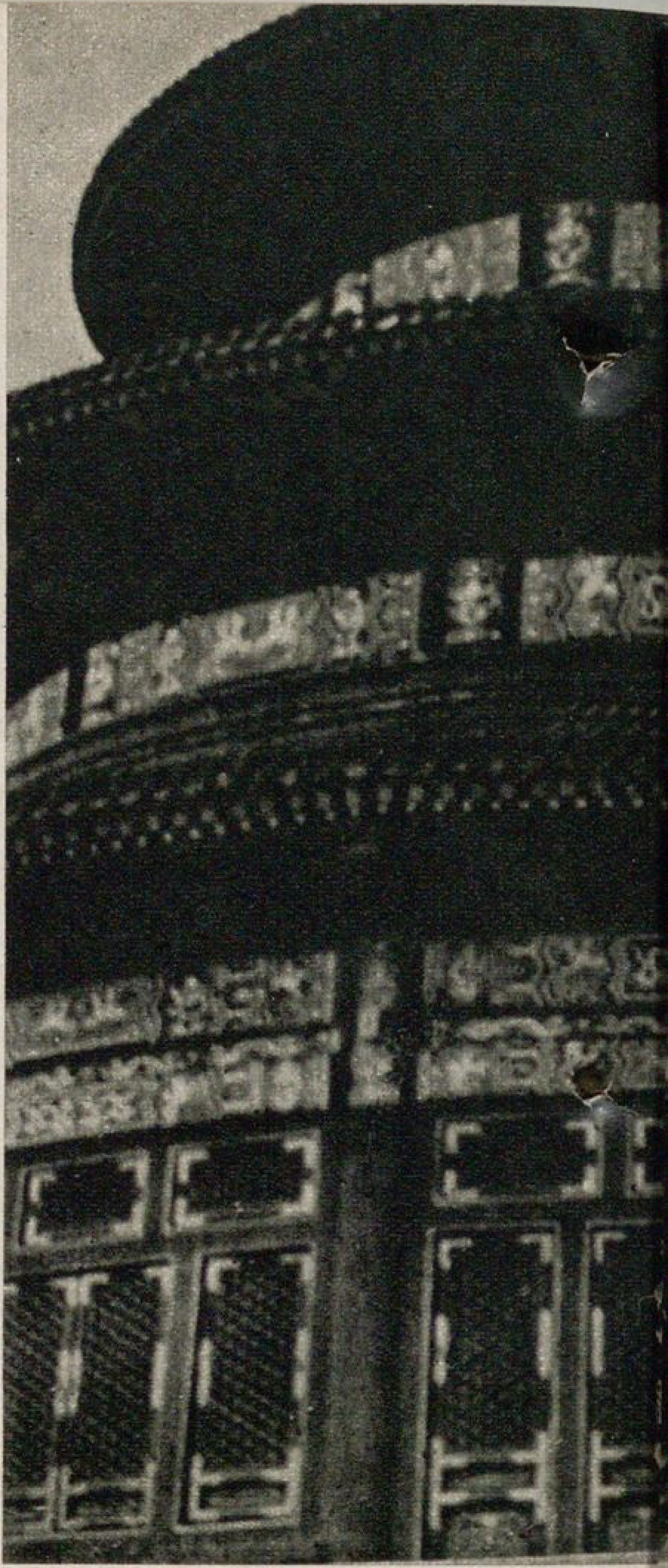
颯爽とハイヒールでペーヴメントを蹴つて行く現代の中國女性である。

若鮎の如く張り切つた肉體を、スマートな旗袍(チーパオ)（これは素晴しきワンピースである）に包んで、何と潑剌とした容姿ではないか。

服地は紗やジョーゼットの如きものが用ひられ、裾廻しなどにはレースをあしらつたりしてゐる。

思ひ切り短く詰めた裾、露はな脚線の美！





あでやかなポーズを作つた女優さん、そして又、舊跡天壇祈年殿の前に立つた二人の令孃…それぞれにイタに着いた摩登女（モダンガール）ではないか。古い歴史を持つ建築物の前に立つても、或は洋館の並ぶ文明都市のアカシヤの並木道を散歩しても、不思議に調和する現代中國女性である。

支那では女性の服裝が一番時代のトツプを歩いてゐるのではあるまいか。



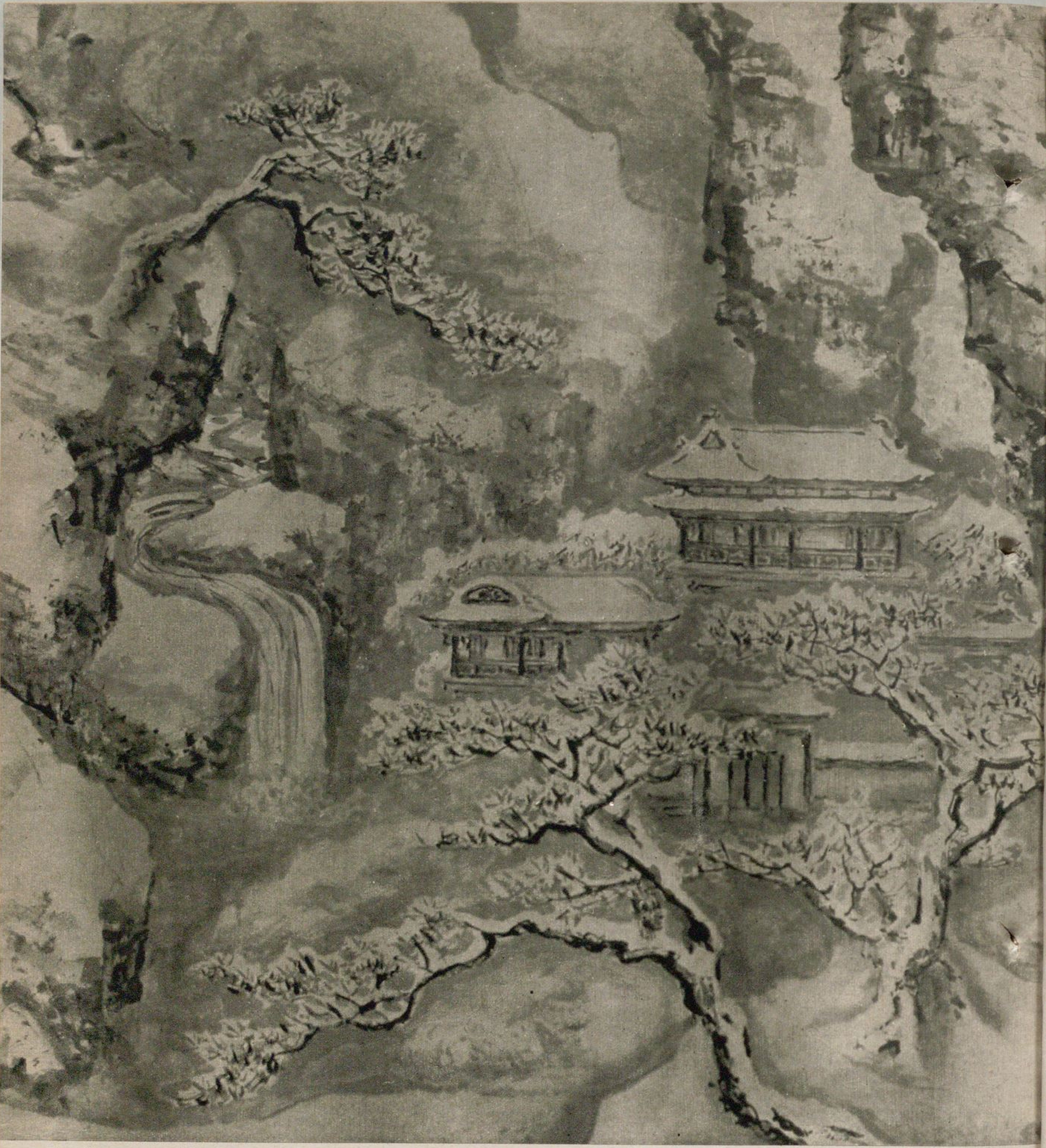
その襟の高さから飾りレースの配置配色に到るまで年々に新しい工夫が凝らされ、從つて流行は猫の眼の様に變つて行く。

唐宋の昔はさることながら、近くは清朝の服裝を以て支那女性を考へてゐた人が——そんな舊體制の人が若し有つたとしたら、實に驚異に價する變革であるだらう。

紫外線除け黒眼鏡を用ひた女學生、粋なハーフコートをちよいと引つかけ

A painting by Kao Feng Han,
a Master Artist of Old China





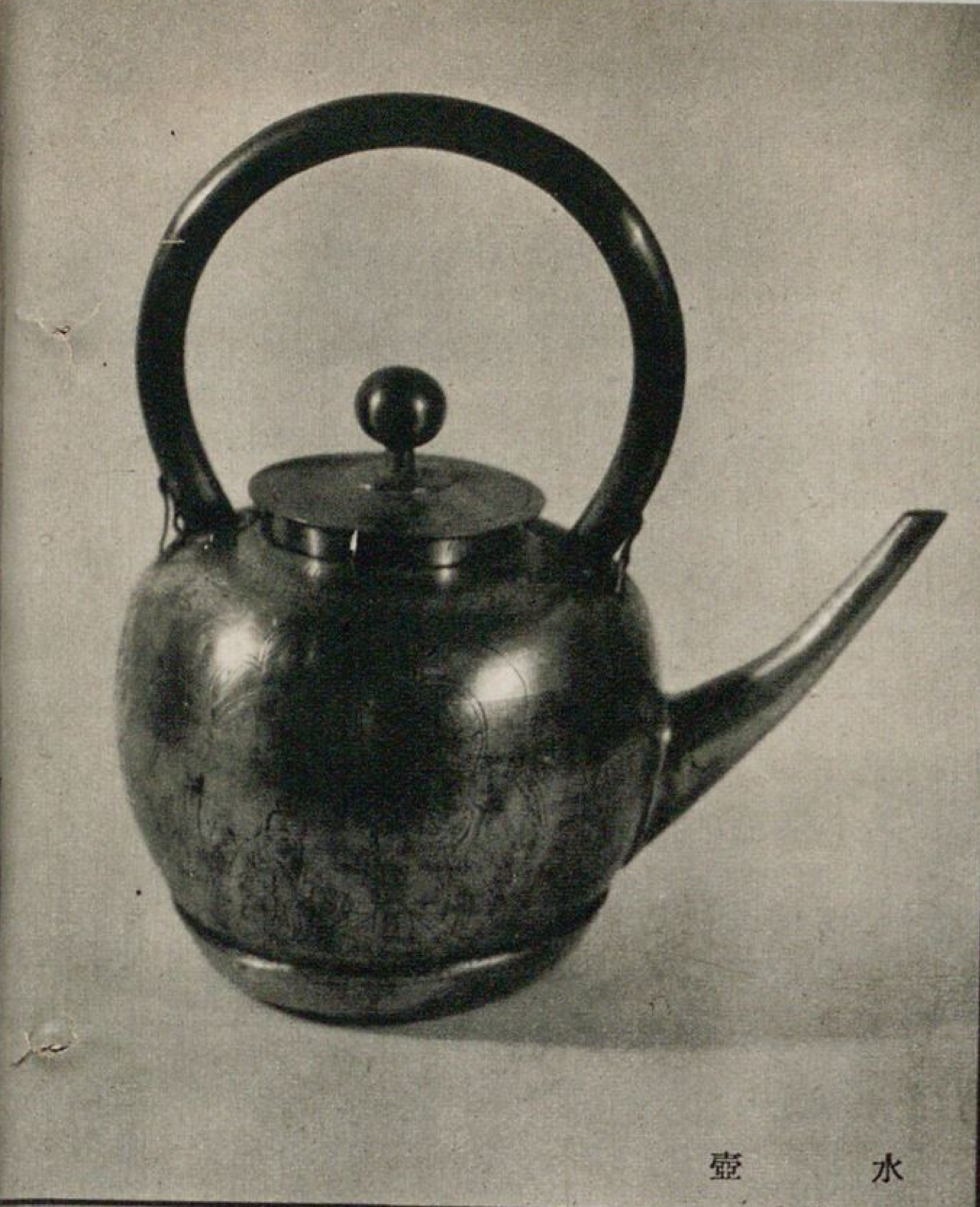
右圖の一部分

雪景山水圖

高鳳翰筆

この畫は以前本誌に掲げた杜脊の撲蝶圖と同じく北京の佐藤汎愛氏珍藏の大畫である。畫面、橫約四尺、高さ約八尺、高南阜としては、稀有の大作である。殊にその文人畫に珍しい寫實風で、墨氣淋漓、構想雄大、まことに傑作中の傑作である。

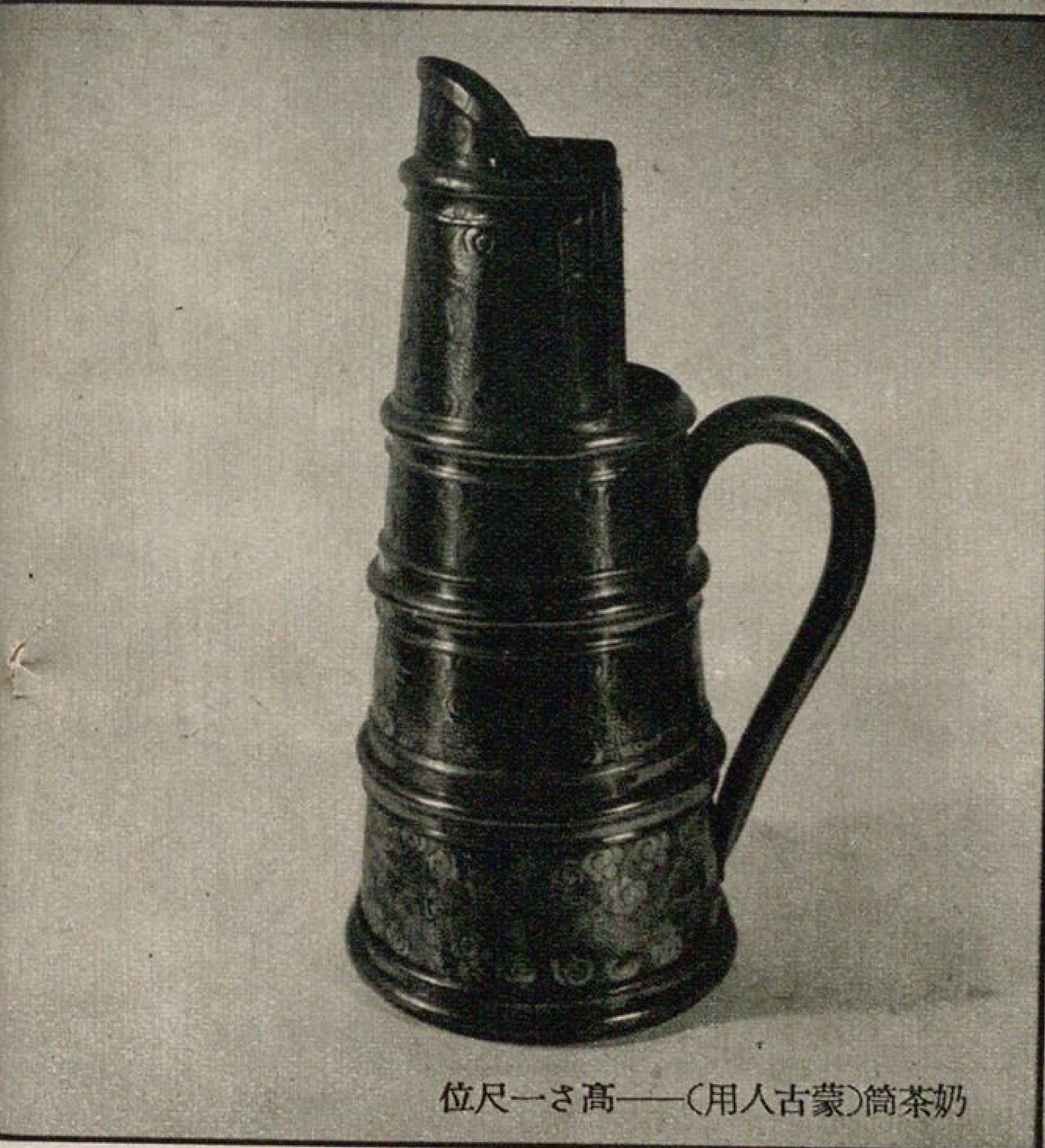
「國朝畫徵續錄」等に據れば高鳳翰は字西園、號南村、晩年みづから南阜老人と號した。嘗て老阜と自稱した。山東徵州の人で、雍正五年、生員を以て孝友端方に擧せられ、安徽歙縣の函に任ぜられた。しばらくして劾せられて官を去り、後年は痺を病んで右臂仁ならず、つひに左手で書畫をかいた。前人鄭元祐が左手を侚んだのに因み、更に後侚左生と號した。その畫、山水縱逸、法に拘はらず氣を以て勝つた。草書をもよくし、圓勁飛動の勢があつた。性豪邁で、一錢を蓄へず、硯を嗜んでその收藏千餘に至つた。みな自ら銘をなし、大半は手琢にかかつた。著に「硯史」がある。乾隆癸亥（八年）六十一歲の時、自ら生壙志をつくり、その銘に曰く「その生を知るも、何ぞ必ずしも死を知らんや。その首を見るも、何ぞ必ずしも尾を見んや。ああ、生事の類、かくの如し」と。この畫、「乾隆壬戌」とある、卽ち六十歲の作である。



水壺



粉盒——家鴨の卵位の大きさ



奶茶筒(蒙古人用)——高さ一尺位



茶鑵——高さ五寸位

Brassware

眞鍮細工

支那は昔から銅器の本場である。人、陶瓷を語つて銅器を語ること少いのは、その變化乏しきにも由らうか。近代銅器は宣德を稱するが、しかし最近のものにも面白みがある。紅銅、即ち純銅製品の外、亞鉛と混じた所謂眞鍮、即ち黄銅の製品が多い。これは黄金の擬色なるが故であらう。銅十分、亞鉛三分を以て普通とする。又錫と混じた白銅製品もある。紅銅製には、景泰藍胎、佛像胎、銅鍋、銅盆、銅壺の類あり、黄白銅器には、墨盒筆架、筆筒、鎭尺、



右は置物・左は香爐



右は香爐・左は蠟扦(祀典用)



手爐——高さ二寸、直徑三寸位



奶茶壺(組立式湯沸し)——高さ一尺位

各種の水壺、文具、水旱、煙袋の類がある。また佛道儒の供器として、香爐、香筒、燭臺、供盤、香油燈の類がある。更に日常用具としての水壺、酒壺、煖壺の類、千態萬様の器がある。その製造業者北京に約三百戸、工人三千餘人であるといふ。その精巧なものは、ここに示した重箱形の重ね香爐、それには精美な小附屬品さへある。この香爐及び提柄つきの火爐には、極めてすぐれた浮彫や透彫が施してある。また打物を接ぎ合せた燭臺と香爐、彫裝を施した茶罐、更に動物形の鑄造に、雕刀を加へた小文房具に至つては、驚くべく立派な藝術雕刻である。現代的の煙草具セットには鍍金や嵌玉や七寶の技術を凝らして、中國金工の妙を誇つてゐる。


無敵！國産第一位
ムッソリーニペン
スラスラ書けて錆びず値の廉い國産逸品！
新生國策イリヂュウム白金ペン付
クラウン万年筆
書きよく體裁優美構造堅牢
流線型
大阪 株式會社
澤井商店

夾竹桃

村上知行

北京を森の都といふのは既に常識となつてゐるやうだが、私はその同じ北京を、花の都とも言へると思ふ。實にこの都には到る所、四季を通じて花が多い。歳のはじめに先づ開くのは桃であり、杏である。つづいて藤が咲き、牡丹が咲く。思ひ出すままに指折り數へてみると芍藥、海棠、丁香、玉蘭、柘榴、合歡の花、玫瑰、菊などなかなか一時に思ひ出せぬ。だがさうした姹紫嫣紅のなかで、恰かも北京を代表するかの如く、最も印象的なのは夾竹桃ではあるまいか！　と私は考へてゐる。第一、開いてゐる時期が、他の如何なる花よりも、ずつとながい。綻びそめるのは大概夏の初めであるが、それから秋の終りまで――言ひかへれば完全に半歳は咲いてゐる。百日紅もながいとはいふけれど到底夾竹桃には及ぶまい。

『北京では舊暦の五月になると柘榴の花の盛りとなつて、それが眩ゆいばかりに鮮明である。人々は往々にしてそれと夾竹桃を中庭に羅列し、以て清玩となす。柘榴と夾竹桃との間には必ず魚缸を配し、それに何匹かの金魚を泳がせるのであるが、どこの家でもきまつたやうにさうするので、「天篷魚缸柘榴樹」といふ諺まであるくらゐだ。蓋しその月並なるを譏つたものであらう』

これは『燕京歳時紀』の中の一節であるが、これに出てゐる天篷といふのは、夏の中庭を高く覆ふ葦簾張りと思つていただけばよろしい。

兎に角、ざつとかういふ工合に、柘榴と夾竹桃とはどこの庭にも必ずのやうに置かれてゐるけれど、但し柘榴の方は一時に明るくパツと咲いて、やがつ散つてしまふ。結局は北京の庭といふ庭の悉くが、夾竹桃で占領される。若し北京から夾竹桃をマイナスしたならば相當さびしいことだらう。ナニ、構ふものか、その時には、百日紅で間に合はすさと言ふ人もあるかも知れぬが、しかし百日紅は表情の乏しい花であり、夾竹桃はそれに反し、甚だ表情に富んでゐる。假りに、女にたとへてみると、前者は田舍のお孃さんのやうであり、後者は都會の娼婦のやうである。私は何の因果か、決して荷風散人の眞似をするのではないけれどお孃さんより娼婦がすきだ。從つて百日紅よりも夾竹桃がすきである。夾竹桃の表情の豐かさと、しかもその表情が『文化的娼婦』のそれであるのが好きだ。

試みに、晴朗そのもののやうな夏の朝、その花のうなづくのをぢつと眺めてゐると、あかい花瓣が美しき娼婦の唇の熱情そのものである。同時にまたそこに嬌態がみられる。執着心がみられる。歡樂がみられる。稍ゝうつむいたその形には、頸をかしげた羞恥心が暗示されてゐるし、勢ひよくのびのび開いた趣きには大膽な快活さが象徴されてゐる。何でも聞くところによるとその枝葉に毒があつて、それをしよつちゆう口に嚙んだりしてゐれば害を受けるといふことだが、若しそれが本當なら絢爛な表情を持つ娼婦としての資格がますます完備する譯である。それにまた此の花は、枝頭に花房をなして咲き、咲いたのは間もなく枯れて、入れかはり立ちかはり、新しい蕾が膨らんで咲くのであるが、その枯れ方が誠に

内容

無惡で、忽ちカサカサの赭土色の塊りとなる。手でさはると、ホロリと落ちる。その脆さ、その凋んだ姿の醜さ、それがまた如何にも彼のゾラによつて描かれたナナの末路をしのばせる。

もつとも夾竹桃には二色ある。一つは紅く、一つは白い。白い方にもそれ相應の趣きはあるけれど、どうも私には、昔左褄をとつたことのある尼さんでもみるやうであまり興味が持てぬ。夾竹桃の如何にも夾竹桃らしいのは矢張り紅いのであらう。

夾竹桃開柳絲長　捲篷高覆午陰涼
綺羅著體猶嫌重　鷓鴣催人懶試粧
瓷枕漫添新汲水　筠籠斜顫夜來香
晩風過處偏貪坐　月影朦朧上粉牆

昔の人の創作に、かうした『京師夏日閨辭』がある。これを詩とみたのでは、少しをかしく、寧ろ文字による遊戯とみるべきであらうが、それにしても驚くべきあでやかさ！　何となく國貞ゑがくの趣きがあり、殊に夾竹桃を點じ來つたところにひとしほの妙がある。試みに散文に譯してみると……。

夾竹桃があかく咲いた。柳の枝も翠に伸びてあくまで長い。篷（乃ち前に言つた天篷）を捲いて高々と庭を覆へば、まひるながらほのかに蔭なす涼しさ！　とは言へ何さま溽暑の頃なので體には、薄物をまとふさへ煩はしい。鷓鴣がしきりとなく。それが人をせきたてるやうである。懶く試みに化粧する。それから次に『瓷枕』とあるのは陶器の枕のことで、中がうつろで水を入れるやうになつてゐる。それに、あたらしく汲みあげた冷たい水を注ぎ込む。『筠籠』は竹籠のことであらうが、それには夜來香が斜めに挿さつて顫へてゐる。『夜來香』とは白い草花の一種で、又の名を『晩香玉』と言ひ、私は嘗て此の花を、もう一つのそれによく似た茉莉花と比較して、次のやうに語つたことがある。

『晩香玉は茉莉花に較べ、同じく白い花でありながらずつと艶である。匂ひも茉莉花の淡く淸らかなのに比し、著しく濃厚で、何となく年若き女の化粧した肌を思はせる。もつとも晝間はあまり匂はず、その白玉の如き六枚の花瓣の開くのも夕暮時で、夜に入るにつれ芳芬馥郁として、むしろ惱ましい』

さて、それから次は、夕べの風である。それがそよそよ吹く。そのもつともよく吹き通ふ一隅を選んで坐つてゐると――『粉牆』といふのは白く胡粉をぬつた垣根のことで――そのうへにおぼろおぼろに月かげがさす。

まア、凡そこんな調子の意味なのであるが、一言一句、女と言はず、美人と言はず、またその姿容を形容するだけの何等の言葉も用ひられてゐないのに拘らず、我々はそこに、李白の詩にうたはれてゐる

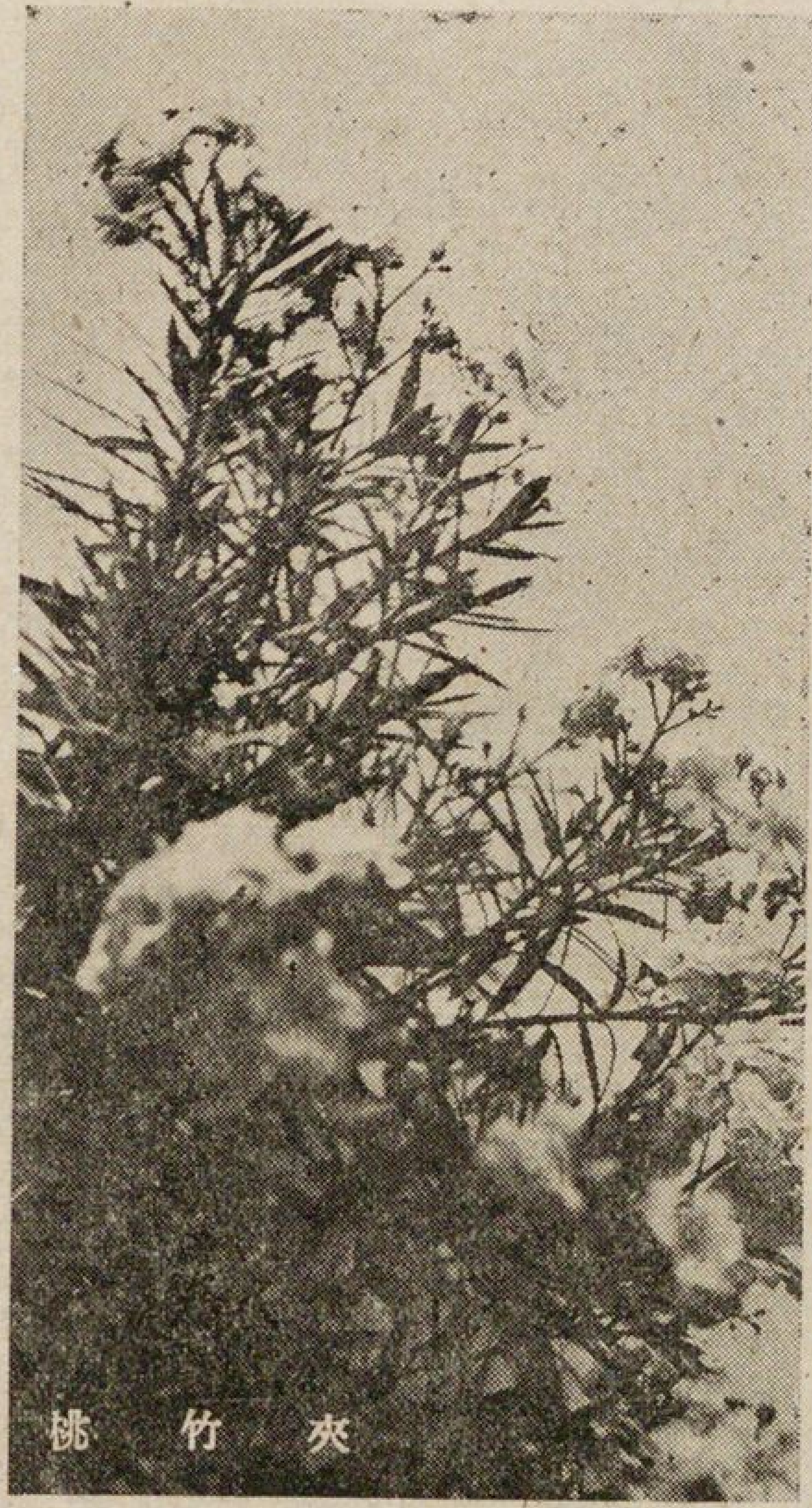
白粧素袖碧紗裙

といつたやうな尤物を、まざまざ想像させられる。そしてその彼女の容貌からうける印象は蛇度夾竹桃の花のやうであらう。

をかしいのは此の夾竹桃が、花瓶にして薩張り風情のないことである。ないことはない、あるといふ人もあらうけれど、私にはさう思へない。夾竹桃はあくまでも陽の射す北京の四角な庭に、蒼空ののどかに高きに對照して眺められるやうに置いたのでないと面白くない。『格致鏡原』に引用されてゐる記事によれば、

『……その花、淡紅嬌艶にして桃に類し、その葉、狹く長くして竹に類す故に夾竹桃の名あり。春より秋まで引續いて次ぎ次ぎに開花す。女達は五六月の候、それをとつて白き茉莉花に配して髮にさす』

とあるが、これも果してどうだらうか？　現に今日さうした女を見かけないところからみると、あまり似合はないのではないかと思ふ。手にとるな、矢張り野におけげんげ草で、娼婦的な夾竹桃は飽迄も、そのままそつと庭にさし置くべきであらう。


夾竹桃

山東八路軍と文化陣綫

島　英　夫

去月、討伐軍に隨行して山東魯南地區を踏査し得た貧弱な資料によつて、抗日軍の文化活動とその現段階的な意義を若干窺つてみよう。

先づ抗日八路軍と中共（中國共產黨）關係について詳しいことはさけるが簡單に知つておく必要がある。八路軍が中國共產黨の指令によつて活動してゐる事はいふ迄もない（中共——北方局——山東分局）特に各抗日軍の政治部には黨員が配置され有力な理論指導と實踐監督が行はれてゐるのであつて現在の段階では八路軍は完全に中共によつてリードされてゐると云へるであらう。隨つて八路軍は單なる集團軍ではなく政治的色彩が強く、政治活動を軍事活動よりも以上に、活潑に行つてゐるのである。近來我が方の掃蕩、經濟封鎖その他によつて軍事的に有力化し得ない狀態にあり、當面の必要から彼等の所謂「大衆動員」と云ふ方向がとられざるを得ないのでもあるが、されば彼等の「大衆動員」は軍の戰鬪力强化のための單なる手段に過ぎないと率直に結論してしまふには少し危險があるやうである。「大衆動員」が彼等の戰鬪力强化を完成すれば、八路軍の軍備强化が如何に行はれたところで、我が實力をもつてすれば之を打破するに單なる時間の問題に過ぎないであらう。

然かも軍事力の破壞によつてだけは解決されまいと思はれるところに問題があり、當局の苦心してゐるところであるといふ事を十分認識してかかる必要がある。之だけの認識があるならば少くとも現在の段階は完く當面の必要に逼まられて、所謂「大衆動員」が理不盡に或ひは歷史的な必然を無視してさへも强行されてゐると單的に推量して差支へあるまいと思はれる次第である。當然、彼等の採つてゐる經濟政策（農業、工業、貿易）の如きも、幾多の矛盾が、露呈し初めてゐるわけであるが、この間にあつて實際經濟的內容とかけはなれて、よく開花し得ない文化活動の實績の如きは此處で深く追求する必要もないと思はれるので、以下二三具體的事則をあげて文化活動の現段階的意義を述べるに留めよう。

彼等の呼號するところの——農民大衆の經濟的內容の充實の上にのみよく自給自足を達し長期抗戰力を培養し得る——と云ふ現實的な方向にあらゆる文化動員が行はれてゐる事はその事自體としては十分意義ある事である。文化の意義が此處では文化そのもののために存在してゐるのではなく、生產活動としてその意義を持つてゐる。（彼等の謂ふ新民主主義文化運動と云つてゐるものの內容には組織自體或は指導者問題があるが具體的にはふれない）

邊區政府及び邊區黨委員會が凡る文化部面に向つて大衆文化昂揚、革命思想啓發に努力してゐる事は云ふ迄もないが、特に一昨年冬期より十一月から二月迄の農閑期を利用した「冬學運動」が積極的にとりあげられ、根本的な問題解決のために大多數の文盲淸掃が一段と努力されてゐることなどは先づ注目されていい事であらう。

民國二十九年十一月に、藝術と云ふ武器を以て、民衆動員を行ふ可く「山東藝術協會」が誕生した。該協會は抗戰陣營に照應して特に內戰反對、或は投降派の陰謀を粉碎する具體的實行を强調してゐるなどは現狀を窺ふに足らう。之には「文藝工作團」「戰士劇社」

中華民國三十年五月十日發行の共產新聞「大衆日報」のカット



陸房突圍的回憶



「魯迅宣傳大隊」等の有力團體を始めとし地方部隊、藝術工作約三十宣傳團體の同志一百餘人が集合、熱意ある討論と現段階の活動方針を決定した。之以前六月には、一一五師部隊の中に文藝愛好家をもつて「文藝習作」團が組織され部隊幹部の理解によつて總會を開催し、附近の各支隊教育機關には分會を設立、各兵團及び政治大隊には「文藝習作力組」を置き、大衆化戰鬪の文藝を中心として部隊教育の推動に協力せしめてゐる。七月初は「魯南時報」に毎月一回發表してゐたがその後第五期より大衆日報（最も有力な抗日紙、紙・インキ不足に堪へて民國二十八年から繼續してゐる）に掲載、半月一回に變更した。部隊の啓蒙工作に山地の文化落伍地區に對して裨益したところ少くないのであるが、未だ歷史的に新しく技術的にも內容的にも單なる公式習作（二部隊の生產大隊化、或はスタハノフ勞働運動等を內容としてゐるは一例）狀態を免れない事は彼等自身批判してゐるところである。此の間從來より山東抗日文化陣綫に有力な役割を果してきた「山東省文化界救亡協會」の存在は等閑視出來ない。前記の藝術協會誕生にも有力に働いてゐるし、文藝工作者の座談會或は文化教育工作者の座談會を開催して文化陣營の戰鬪化を計つてゐるが機關雜誌としては「文化陣地」に依つてゐる。十一月十六日の文化教育工作者座談會には「中共山東分局宣傳部」「一一五師宣傳部」「八路山東縱隊宣傳部」「戰工會教育組」「省各救國會」「各救國聯合會宣傳部」「中蘇文協山東分會」「靑年團」「戰士劇社」「魯迅宣傳大隊」「新山東報社」「戰士報社」「文藝習作會」「大衆文藝」その他宣傳教育機關團體代表が出席した。今座談內容の一端を示さば

甲、組織と指導

一、指導確立問題

二、上下級と各部門工作の連絡問題

三、幹部の網羅訓練問題

乙、目前の工作

一、文藝工作

二、新聞工作

三、教育工作

丙、專題討論

一、大衆化

二、戲劇編導と戲劇運動の推進

三、刊物編輯

大體以上の通りで特に中共山東分局の指導者朱瑞政治委員が出席、宣傳演劇問題に及び京劇利用に就いて臺本問題發表形式、地方特殊性による利用問題等、割合に詳細な批判を試み目前の政治形勢に照應した文化活動を强調した。

即ち抗日根據地における文化運動の徹底方針が決議されたのである。各抗日根據地にある農村倶樂部、農村地方劇團等がかかる決定に基づいて、更に娛樂的なものから政治的なものに一層推進された事は申すまでもない。その他今年行はれた美術展覽會における繪畫木刻等の動向にも一般大衆の政治意識昂揚が强調されてゐる。

五月は革命月として各地と同樣抗日精神の振起に狂奔したが、宣傳演劇の劇目にしても從來の漠然とした抗日內容から目前の政治形勢に應じた「麥收隊」「春耕運動」「代工團」等の具體的內容を說明せんとしたものをとり入れ極力農民大衆の理解のもとに積極的生產參加を求めてゐるが、實際には今や目にみえだしてきた諸方面に涉る生產力の低下を挽回せんとして狂奔し、特に農業生產の低下は食糧問題を惹起してゐるが斯る生產部面の破綻、即ち農民大衆の不當な犧牲を隱蔽しようとしておひきれない切實な惱みを表はしてゐるに過ぎない。

今や文化活動が戰爭目的のために動員される事は當然として、農民の經濟的逼迫の中に然かも單なる宣傳的意義を脫しない文化段階で、果してどこ迄「民衆動員」に喰ひこみ得るか興味深い問題であらうと思はれる。

（筆者は滿鐵北支經濟調査所員）

北支の鐵道保健

村瀬　渉

　保健と言ふ言葉が世人の耳朶に入る様になつて未だ六七年にもならないので往々火災保險や生命保險の保險と間違へられる惧れがあるがこの保健と言ふのは卽ち健康を保持すると云ふ字義で疾病の治療や豫防より健康增進體力の增强を計り如何なる仕事にも堪へ得る體位を備へしめる様に指導することである。從つてこの保健業務には勿論醫學的な智識と技術が多分に必要であるが醫者ばかりの仕事であると考へるのも間違である。醫者が患者を診て治療する等は此の一小部面であつて職場に於ける作業の保健指導や凡ゆる生活の保健的な指導はその重要なる業務範圍であり又最も積極的部面として各個人の體育指導も之に屬するのである。

　如何なる仕事も又事業も之に携る人的資源の健康度が問題であつて現に最近の戰爭や事變に於ても此の人的資源の如何が直に其の勝負を決するので保健業務の重要なことも萬人の等しく認める處となつた。

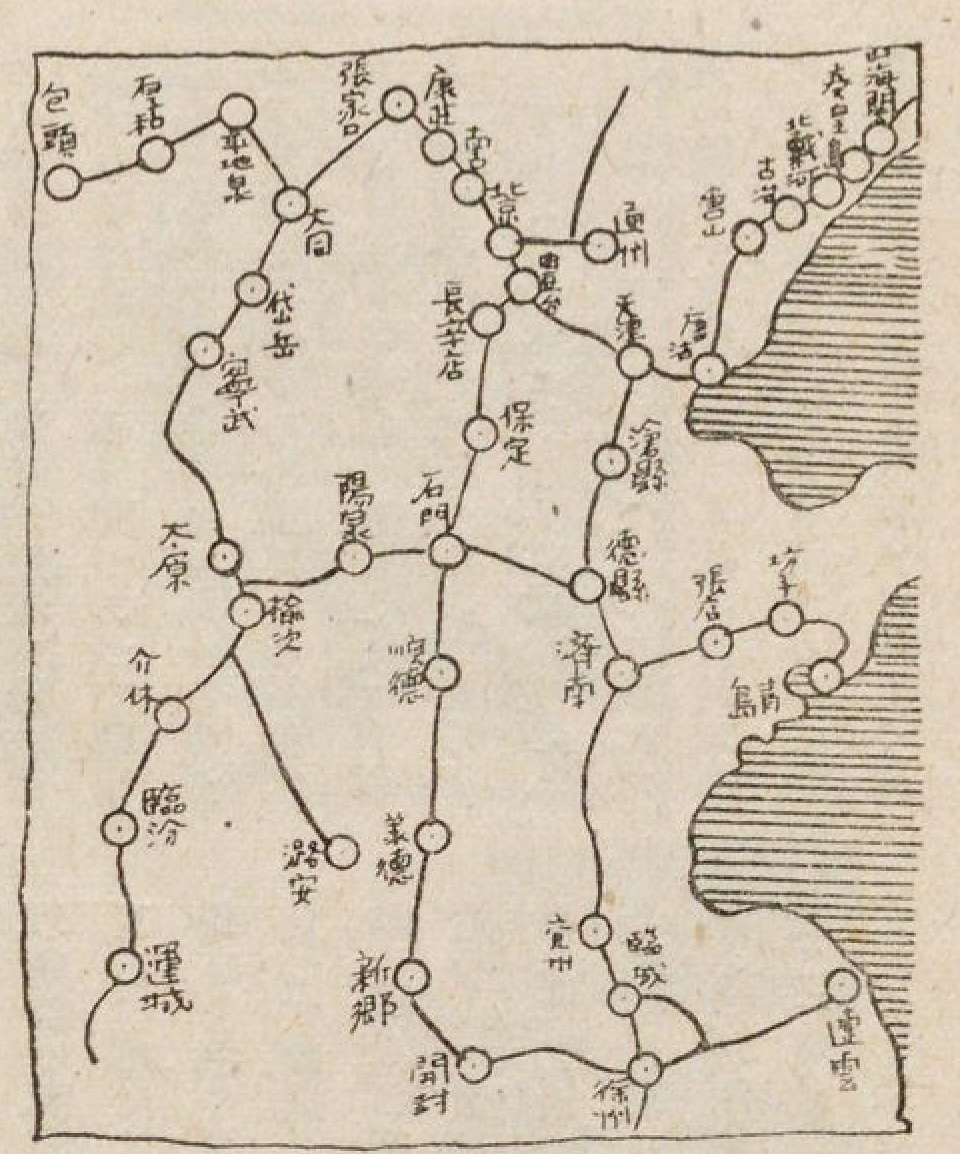
　今次支那事變以來の北支鐵道事業を擔當する華北交通會社に於ては特にこの保健業務の重大性を認め凡ゆる部面に於て之を有効に取入れ理想的に運營されて居る。

　今次事變が蘆溝橋の銃聲によつて惹起されて以來皇軍と全く一體影の身に添ふ如く武器なき鐵道戰士の進歩活躍は全く偉大なるものがあつた。既に頭初の七月十八日には醫師、看護婦其の他合して十三名からなる救護班が滿鐵派遣員の救護の爲に、天津に派遣せられ、天津襲擊の硝煙の下に活躍したのを始めとして、次々に豐臺、張家口、石門と軍と共に進出する鐵道戰士に混つて鐵道醫人の追從こそ北支鐵道戰士の建設の裏面の大なる力となつたのである、時には「メス」持つ手に鍋、釜鉋丁を握り又時には「ストーブ」を背負つて前進し、救護所の開設に當つた鐵道醫人の努力と辛苦を、世人特に一般醫人に充分知つて貰ひたい。斯くて僅かに二箇年有半に現在の五千九百粁の鐵道沿線に四十五箇所の鐵道保健機關の足場を創つたのである。この救護班こそ華北交通會社の保健業務の濫觴であつて單に疾病の治療や救護に止らず氣候風土の違つた北支の生活に將又惡疫の流行に鐵道人を護る傍ら診療機關の建設に努力して來たのである。

　此の様にして現在に至つた華北交通會社の保健醫療機關は北京、天津、濟南、青島、張家口、石門、太原、開封の八箇所に鐵路醫院を、其の他の要地三十六箇所に分院を設置し鐵道保健業務の現場機關として全鐵道從事員の疾病は勿論保健指導に萬全を期し鐵道運營に後顧の憂なからしめて居るのである。

　醫院の施設に於ても暫時近代的醫院施設を整備し、之に擔る醫師の數も三百名の多きに達して居る．看護婦その他を合すると一千五百名の大世帶で、此の保健業務に當つて居るのである。

　醫院施設は以上の様に整備されて來ては居るが何と云つても事變後全く何の施設もない所から發足したのであり特に建物に於ては、猶充分とは云へない。僅かに北寧鐵路時代の二三醫院施設が利用出來た外は全く民家なり買收家屋の改造を以て施設されて來たので入院患者の收容力は現在僅かに一千名に過ぎない。然し患者取扱數に至つては百三十七萬餘の多きを數へ診療業務の多忙も想像が着くと思ふ。唯此處で



鐵道保健機關の所在地

一言付け加へて置かねばならぬのは前にも記述した樣にこれ等の醫院は鐵道保健業務の現場機關であると云ふことであつて單に診療部門を擔當する在來の病院や醫院とは違つて、診療部門の外に健康なる鐵道從業員やその家族の健康保持を指導して行く部面を持つて居ると云ふことである。此の點が在來の醫院と違ふ點であつて華北交通の保健業務の大きな特色の一つである。即ち診療部門として內科外科或は小兒科眼科と凡ゆる科を本院には整備されて居ると同時に保健部門とも云ふ可き豫防科、檢診科、病理科と云ふ科が設置されて居る事である。

豫防科は鐵道從事員並びに家族の惡疫或は傳染病の防疫に携ると同時に一般の鐵道防疫にも當り、全北支の傳染病の防遏に乘出す外、社員並びに家族の北支に於ける生活の保健指導を擔當し眞に健康從事員の育成に努力する。

檢診科は社員の疾病中最も怖る可き結核を未然に發見して豫防する。又場合によつては家庭人に迄も之を檢診して療養並に健康支持に付き充分なる指導をする科であつて、斯くして此の人的資源の重要なる時代に於ける大陸鐵道業務は完遂されるのだと思ふ。

病理科は氣候風土の異つたこの北支に於ける地方病の調査は勿論患者を種種なる方面より病理學的、細菌學的に檢査を行つて疾病の原因を探究する。

以上一應醫院の特有なる分科を説明したのであるが之も單に一つの分科であつて診療部門の各科擔當醫師も保健部門の各科の醫師も皆鐵道保健業務擔當の社員として常に此の新しい鐵道保健業務を理解して社業に邁進して居るのである。從つて鐵道業務上必要なる愛路工作等には何科と云はず協力し宣撫醫療に進出するの體制をとつて居るのである。

從來醫師と云ふ者は診療を特種の技能として社會的にも特殊の地位に置かれて今日に至つて居り特知な醫學的知識を持ちながら單に診療のみに應用することを以て滿足して來たかの感がある。從つて往々鐵道診療機關に携る醫師も此の古い觀念に捕はれ、診療をすれば自己の仕事終れりと云ふ感を抱いて鐵道の社員たることを忘れるものがあつたのであるが華北交通の保健機關に携る醫師は、事變勃發以來の苦しい建設の體驗と大陸先驅の醫人としての矜持を持ち、常に鐵道本來の目的と大陸發展の民族的氣魄を以て新しい醫師としての使命を充分認識して鐵道保健業務に從事して居る。

此の自覺と此の實踐を一般醫師にも大いに知らしめたいと思ふ。內地に於て、醫師會の問題や或は醫藥制度云々と絶えず話題が起るのも、一に此の新しい醫師としての使命を認識しないためである。斯くの如き古い醫者としての觀念を持ち特殊の社會的地位に無る時は醫師も又理髪師と變るところなきに至るであらう。

華北交通の保健業務は斯の如く新しい醫師の自覺の下に遂行されて居るばかりで無く會社運營業務の中にも明にそれが職制に取り入れられて居る。各鐵路局の職制に見る如く局長の直接の「スタフ」として保健處が設置され鐵道運營の樞機に參劃して居るばかりでなくこの保健處長は皆醫師である。全く新しい鐵道業務體制と云へよう。新しい大陸鐵道の醫師として將又華北交通社員として醫療技術社員の眞に鐵道のために死し得る職制であらう。

華北交通の保健機關の特色と云ふべきこの業務體制は凡ゆる事業に於ても執らる可きであると同時に之に携る醫師の新しい保健業務への自覺が第一條件だと思ふ。

終りに華北交通の保健業務の一つとして本社北京に保健科學研究所が設置されてゐて前述の醫院と有機的に連絡をとつて地方病の調査研究や各種疾病の原因檢索を行ふは勿論北支に於ける邦人の生活を凡ゆる角度より研究して保健指導に當つてゐるものであつて各種血清「ワクチン」類を始め衞生豫防藥劑を製造し、鐵道の需要を自給自足せんと努力してゐる。

（筆者は華北交通總務局參與）

北支畜産の展望

坂本種夫

畜産は、北支に於ける一大産業であり、他のすべての産業と極めて密接なる關係をもつてゐるが、この廣大なる北支の地域は萬里長城及び陰山山脈を境として區劃せられ、兩地域は政治經濟的に或は地理的に各種の條件を異にし、從つて農畜産業も夫々或程度の特異性を有してゐる。即ち南の農耕地帶は人口稠密で極めて集約的な農業經營が行はれ、農業は家畜を基礎として組織せられ、農家は必ず數頭の役畜及若干の豚、鷄を飼育し農耕に必要な勞力を供給し、毛、肉、卵を生産して農家の交換經濟に寄與して居り、なほ亦北部地域の住民は大部分蒙古人であり、未だに遊牧生活或は半農半牧の生活を營み、家畜は彼等唯一の財產であり、日常生活の基礎をなしてゐる。

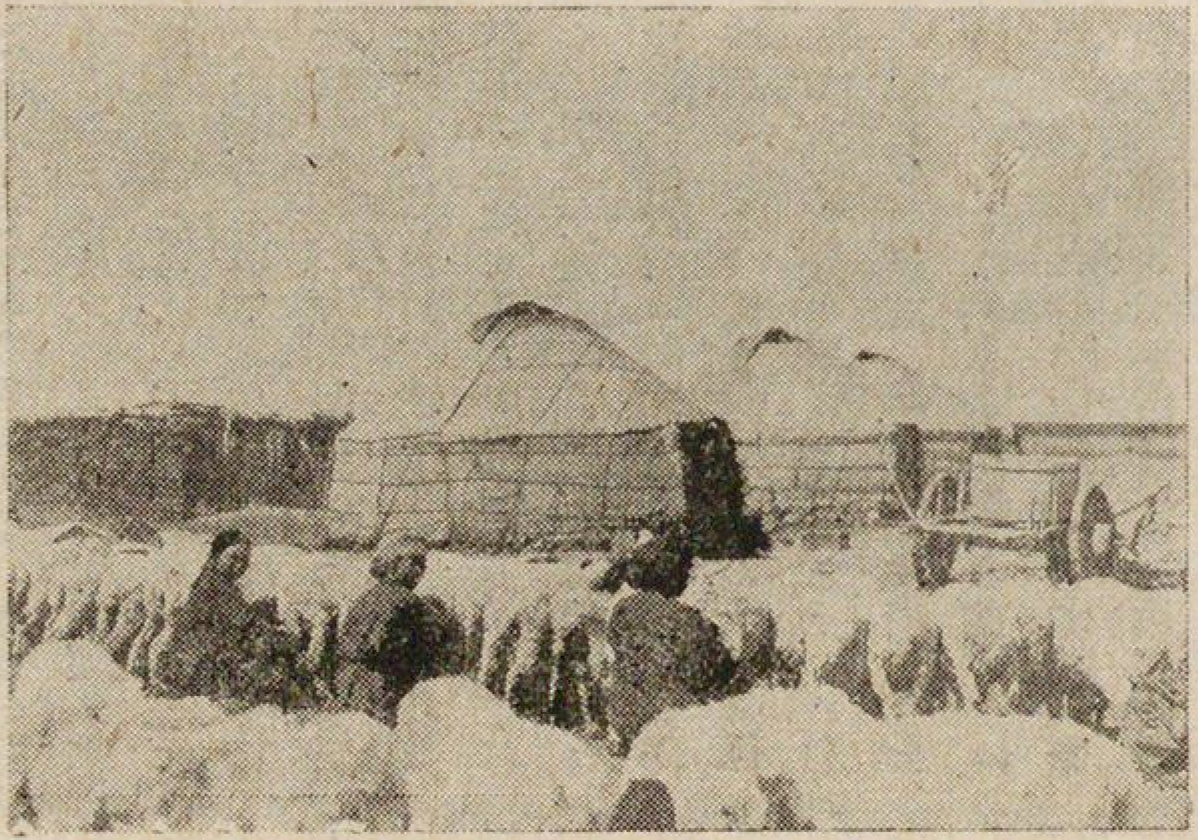
斯くの如く重要なる北支畜産業も從來半原始的半封建的な舊形態のまゝ等閑に付されて來たが、今や時勢の推移に乘つて近代的民族組織へと格段の飛躍を示してゐる。

一方滿洲事變に次ぐ今次支那事變なは亦國際情勢變轉常なき現時に於て、全國民を擧げて眞劍に考へねばならないことは生活必需品であるばかりでなく不可缺の軍需品である羊毛、毛皮、皮革、食肉等畜産物の日滿支經濟ブロツク内に於ける自給自足並びに國防馬匹の確保に在り、我が國に於ける之等畜産物の需要額はその主なるものを觀ても、年間羊毛二億ポンド、毛皮類八千萬枚、皮革類二百萬枚、食肉三萬トンその他併せて四億圓に達し、而もその大半は圓ブロツク外の輸入に依存してゐる現狀である。もし一朝重大時局に直面すれば、之等英米市場に於て强制管理策の採り上げられることは必定で、結局何といつても日滿支經濟圈内で出來る限り、畜産物の增産改良を圖り、完全とは行かぬ迄も非常時局に備へ、經濟恐慌襲來防止策に當ることは刻下の急務である。

滿洲事變後王道樂土滿洲帝國建設と共に諸種の家畜、畜産物の增産改良及び需給調整問題は國策の線に沿つて日滿協調し、既存計畫に基いて著々その實績を進めつゝあり、且亦今次の支那事變は此の畜産振興對策遂行上に一大轉換促進期を劃し、事態の進展と共に愈々日滿支を一體とする產業經濟ブロツクの確立が具體化するに至り、日滿支協力一致步調を整へ、北支に於ても現地の特殊事情に鑑み、軍、興亞院の畜産指導大綱に基き各機關が之に協力し、內地當局と密接なる協調連絡の下に、家畜、畜産物增産改良計畫實施に專一邁進してゐる。

北支畜産の增產目標

農業勞力として牛、馬、騾、肥料として牛、馬、豚、鷄、衣食糧用として牛、羊、豚、鷄を考へる時その各々は農業經營型態に應じて農家に折込まるべきは當然であるが、馬、羊の如くこの範疇を稍脫して他の方面よりの要求に基いて敢へて改良增殖すべきものもあり、また一方農村經濟更生の觀點より考へる時は勞力と肥料を最大限に供給し資本僅少にして回轉收益の大なるものを最とするは論なき處である。牛、馬、羊、豚、鷄は宗教上或は農業事情からして地域的に飼育狀況に多少の相異はあるが、豚と鷄は中國人の嗜好或は需要の點或は食糧に肥料に收益の確實性に於て、なほ亦獎勵と普及の容易性を有する點に於て最も易く實施獎勵し得るものであり、先づ豚、鷄より開始するのが得策であらう。しかし亦一方回敎徒、蒙古人等は豚の飼養を宗敎的に嫌忌するからして必然的に牛、馬羊、鷄に限局されることとなるが、此の點に就いては特に國防馬匹確保、羊毛生產力擴充强化等に於て、重要視されねばならず、しかして現狀の食肉不足及農村疲弊狀態よりして、或は農村對策並びに軍需用及び外貨獲得用畜產物の恒久的供給基地培養を考慮し先づ家畜數の增加を圖るのが緊急の要務であらう。



蒙疆地方に於ける羊毛の收穫

北支の畜産資源

北支の畜産資源に就いては未だ全面的に信じ得る統計なく誠に遺憾ではあるが、今之等の資料並びに筆者の調査に基き、その概況に就いて検討してみよう。

北支に於ては事變前牛四百七十萬、馬百四十萬、騾驢五百九十萬、緬山羊一千四百六十萬、豚九百三十萬、鷄四千四百萬の家畜が廣袤百餘萬方粁の地域に六千萬の農民と三十萬の牧民によつて飼育されてゐるが、これによつて生産される畜産物は大半、對外輸出せられ、世界市場に重要なパートを占めて居り、その主なる品目に就いて觀ても、年間豚毛二百萬トン、緬山羊一千萬トン、牛馬皮二百萬枚、羊毛皮五百萬枚、加工卵二千五百萬トン、食肉九百萬トン、その他併せて六千萬元の莫大な數量に上つてゐる。斯様に活況を呈してゐた北支の畜産業も、今次事變勃發と共に治安の不備、輸送取引機構の破壊等のため、一頓挫の形であつたが、皇軍の進駐、治安の整備強化に從ひ畜産振興對策の樹立と相俟つて復興の道を辿つてゐる。事變後に於ける家畜の減少状況は勿論地域的に多少の相異はあるが、筆者は牛二〇――三〇%馬(騾)一〇――一五%、驢一〇%、緬山羊二五――三五%、豚三〇――四五%、鷄四〇――五〇%程度の減少と觀てゐる。また事變後の家畜の管内外移動状況を鐵道輸送に就いて觀るに、昭和十四年度、牛十萬、馬四萬、豚三十九萬、羊二十二萬(共に民需用のみで概數を示す)が移動して居り、主に牛は津浦、膠濟、馬は津浦、京山、豚は京山、京漢、津浦、羊は京包、京漢、京山各沿線地方から出廻つてゐるがその頭數に於ては事變前に比べて可なりの減少をみてゐる。尙畜産物に於ても同様であるが、大半の畜産物は現在軍需重要物資として統制されてゐるため數字的檢討は特に控へることとする。

華北交通の附帶畜産業

北支に於ける有畜農業經營の合理的指導を行ふためには、農業に折込まれた家畜の實態を明らかにして、その據り所の原因を把握し指導することが肝要であり、只々技術の亂用によつて、之を過つやうなことがあつてはならない。卽ち先づ諸種の方策或は工作を實施する前に、農村に於ける家畜の特性及その飼育状態を闡明し、農家と家畜との經濟的、農業的、或は宗教的、相互關係を詳細に調査し、且また今次事變に因る災害状況を調査研究することが必要であらう。華北交通會社では夙にこの點に留意し、事變直後より硝煙未だ去らぬ北支の農村に調査のメスを振ひ諸種の貴重なる基礎的調査資料を公にしてゐる。一方北支の治安は皇軍將士の勇戰によつて着々確保されつつあるが、いまなほ共産系敵匪の蟠居蠢動は活潑にして、鐵道の破壊と皇軍占領地の治安攪亂を續けて居り、會社は鐵道の安全確保を期すると共に東亞共榮圏の確立を圖るため、軍の鐵道愛護村指導大綱に基き、愛護村を結成し、「一民愛路萬民享福」「以民護路」のスローガンを樹て、治安工作、福祉民生工作、等に眞劍なる活動を續けて居り、會社附帶畜産業の實施も之と不卽不離の關聯のもとに沿線八箇所に兵站基地にも等しき畜産施設を置き、利民工作、畜産資材の整備を圖ると共に優良種畜の配付、飼育管理の指導、或は防疫、或は製品の處理加工、販賣斡旋等に當り、徹底的有利な經營に誘導してゆき、之を模範として漸次家畜の普及を計畫してゐる。

しかし又北支畜産の增産を計る前に先づ考慮すべきは防疫の徹底である。各種獸疫の常在する劣惡條件の下に生育する北支の家畜は、勿論他の文明諸國の家畜に比し或程度自然免疫に依る強力な抵抗力を有してはゐるが、一度猛烈なる病毒が蔓延する時は忽ちその慘害甚しく、水害、旱魃と共に農村を疲弊せしむる原因となる。卽ち役畜はその價格比較的高く、資本を要し再び購入するには數年の蓄財を俟つか、又は借金の負擔が重加されるかであり、用畜に於ては副業的收益の道が杜絶してゐるため、農家を一層貧窮化するに至るであらう。殊に京包線以北内蒙地區は家畜傳染病の巢窟とまで謂はれてゐる狀態であり、各種防疫の徹底を期することは最大限度に於て現在頭數維持を可能ならしめ、更に增殖の效果を大にするものであり、家畜頭數の增加は飼料資源の增産と並行し防疫の徹底に勉めなければ、恰も實を求めて花を剪るの愚にも等しいのである。ここに於て華北交通會社では獸疫研究機關を設け各種獸疫の研究に當ると共に豫防藥品の製造、鐵道輸送家畜の衞生確保に多大な實績を擧げつつある。

華北交通創立なほ日淺く整備完きを得ないとは言へ北支畜産業の重要性に鑑み、會社の特殊性に準據して、調査實施、防疫の基本體制のもとに、附帶畜産業完遂に著々その實績を收めつつある。

(筆者は華北交通資源局員)

油炸檜

黄子明

傳へ聞くところに據れば、明初の頃南支浙江省の杭州で、油炸檜といふ油で揚げた點心が創めて拵へられて素晴しく大衆の嗜好に投じた。この點心の製法は極めて簡單なものだが、飽きのこない本質的味力ゆたかなことはいふまでもなく、そのうへ油炸檜といふ名稱が殊に大衆の心理的好感をいとも强烈に捉へたものらしい。

炸とは油で揚げること、檜は卽ち南京の秦檜の檜で、石川五右衞門の釜うでぢやないがつまり秦檜を油揚げにしたといふ意味から來たもの、點心としては實以て突拍子もない名前をつけたものである。

だが、杭州は昔南宋の首都臨安で南宋の大忠臣岳飛の祠廟が、西湖畔に在り、從つて市民の岳飛への崇仰と同情とは人一倍深く、同時にまた岳飛を讒訴した秦檜を永劫極度に憎む杭州で、この秦檜を油揚げにするといふ名の而かも美味であり、その上極めて低廉な點心を賣出したのだから大衆の歡迎ぶりが想像される。

朝餉に點心をとる習はしの中國人には、この油炸檜は實に持つて來いの點心で、製法は至つて簡單でありどんな僻地でも容易に出來るし、風味よく且ついつ喰べても飽くことがないので驚て幾何もなく四百餘州津々浦々にまでひろまり、四億大衆朝の點心として一日も缺く可からざるものになつてしまひ男女老幼貴賤貧富を問はず、これほど朝餉に愛好される點心は全く他に比類がない。

揚げものなるが故に油がよければよいほどお美味しく、何んといつてもいちばん美味な油炸檜は胡麻油を使つたのを最佳とするが、その土地土地に特殊の植物食用油を産出する中國のことなので使用油は各地で異なる。卽ち、四川貴州湖南の長江上游では茶油、南支一帶は菜種子を搾つた菜油、華北では普通に落花生油、滿洲國では豆油を一般に使ふ。だが何處に往つても最上の油炸檜は胡麻油で揚げる。

揚げたての油炸檜をそのままむしやむしや喰べるほどお美味しいことはないが、冷めたものでも、もう一遍それを火でほんのり焦して喰ふのも旨いしまた牛乳や豆乳の中に千切つて入れて喰べたり又、燒餅の中に餡代りに詰めて喰べるのもなかなか風味がある。上海ではふかしたてのコワ飯でこれを餡に包んだのを朝街々の露店で賣つてゐるが素敵に旨い。又、いろいろの家庭支那料理の汁物の煮あがつたあと、これを五分切りにして入れるのも頗るしやれた味ひで、日本人の每朝する味噌汁の中に、ものは試し、これを入れて召上つて御覽じろ。

上述の如くこの油炸檜の發祥は南支であるけれども、南支のそれよりも却つて北京の方が遙かに美味だといふ人がある。蘇州の大儒で口のおごつた故兪曲園は、その憶京都詞のうちに「油炸檜は原來南製のものなるに、北製の美味に及ばざるは何ぞや」といつてゐる。

この點心の原名は油炸檜であるが、炸と殺の音が似通つてゐるところから江南の鄕人は油殺檜ともいふ、また檜と鬼も是れ亦た略ぼ同音なので油炸鬼ともいふ。そのほか華北では炸果子、麻花、やや品のいい文語的名稱としては油條ともいふ。

（筆者は在北京中國人）

津浦鐵道沿線の歷史景觀

小野勝年

津浦線は京漢線と共に支那本部を南北に連結する二大幹線である。その通過地域は河北・山東・江蘇・安徽の四省であり、黄河、揚子江兩河の下流を結んでゐる。惟ふに「尙書」禹貢の九州の中、冀州・兗州・青州・徐州・揚州の五州を縱貫するこの地域は、ただに範圍が廣大なるのみならず、人文の開明も亦頗る早かつた。從つてその歷史景觀は複雜多面であること申す迄もない。即ちここにあつては南方と北方とで著しく地理的情況を異にし、生活樣式も同一でなく、文化の樣相亦これに應じてゐる。漢の司馬遷は早くもこの兩地方の相違に注意して、南方に就いては「楚越の地、地廣く人稀に稻を飯し、魚を羹とし、或は火耕し、水耨し、果蓏、蠃蛤は賈を待たずして足る。地勢食饒く饑饉の患なし……この故に江淮以南凍餓の人なく亦千金の家なし」と述べ、更に北方に關しては「沂・泗水より以北は五穀桑麻に宜し、地ふに人衆く、數水旱の害を被り、民は蓄藏を好む」と斷じてゐる。これは今を去る二千年以前のことであり、從つてその事情は固より今日と同一ではないが、何れにせよ彼が南方と北方とに諸種の點で著しく相違のあつたことを指摘してゐることは注目に値しよう。

偖て、その南北を劃する地點は何處に求むべきであらうか。それは云ふまでもなく淮河の一線とすべく、鐵道沿線の都會を以つて强ひて比定するならば先づ安徽省の中心地たる蚌埠附近であらう。果して然らば南北に於ける地理的文化的相違が歷史上に現はれるのはこれ又當然である。早くも春秋から戰國に亘つて北には齊と魯とがあり、南には楚と吳とがあつて相對立した。齊は臨淄に都し、桓公時代には隣邦の魯を壓して、五霸の一人として數へられた。これに對し、當時湖北省の郢に本據を置いた楚も亦漸次勢力を得て北上し、成王時代には黄河流域を脅すに至つた。かくて齊楚二勢力の衝突が初まることとなり、紀元前六五六年、成王は河南の召陵に於て桓公と平和會議を締結し、かくて楚の北進的勢力は一時阻止されるかに思はれた。然るに桓公の沒後、楚は遂に江蘇の徐州地方を獲得し、降つて莊王時代には魯を侵し、蜀邑〔今日の泰安縣〕に於て魯を初め齊・宋十餘國と會盟し、この際山東最南の郯城縣地方はその領域に屬することとなつた。即ち大體今日の江蘇北部は、楚の領域として容認されたのである。ところが楚は中原進出を急ぐの餘り、國內經營を空虛にし、その結果、背後に於て吳の勃興を許すこととなつた。そこで吳王闔閭は楚都を襲つて昭王を走らせ、更に淮北地方をも勢力下に置くに至つたのである。これに次いで興起したのが越王勾踐である。彼の勢力圈も淮北に延び、徐州に於て齊・魯・晉等と會してゐる。

以上が春秋時代の形勢であるが、戰國時代も津浦線を挾さむ南北對立の形勢は變らず、北には齊があり、南には楚があつた。當時前者は依然として臨淄に都したが、後者は紀元前二七八年に陳〔河南省陽縣〕に都し、更にそこから壽春〔安徽省壽縣〕に遷つてゐる。而もこの間吳越を滅し更に魯にも及んだのであつた。

魯と云へばその都は曲阜であつた。その名は頗る吾人の膾炙するところであるが、春秋時代に於ても二流の小國で、齊・晉・楚何れかに從屬して僅かに獨立を維持するに過ぎず、戰國時代になつては、益〻微々たるものであつた。然し、文化史上燦たる光芒を放つてゐるのは云ふまでもなく、孔子が此處に生れて實踐道德たる儒學を唱導したがためである。彼は弟子頗る多く、その著名なもののみでも七十人もあつたと云ふ。師の沒後弟子は四散したが、やがて齊に於て稷下の學として榮ゆべき基礎となり、降つて漢代、儒學一宗となつて朝廷に尊崇され、以後歷朝統治階級の擁護するところとなり、東洋文化史上に大なる影響を與へたことは周知の事實である。これに對して道家の祖たる老子は宋に起り、その學はやがて鄭・楚にも及んだ。彼は沛の人と云ふが、一に楚の出身とも傳へてゐる。若しそれ孔孟の學を以つて北方的と評するならば、老莊の學を南方とするも必ずしも過言ではあるまい。後者は漢代淮南王劉安の下に於て命脈がつながれ、降つて東晉から南朝に亘り淸談の思想的背景をなして華咲いたのであつた。さて、齊・魯と楚・吳とに依る南北の對立は秦の天下統一に依つて一先づ解消したかに見えたが、それは未だ根本的なものでなく、始皇帝が崩ずるや陳勝・吳廣が安徽の宿縣に於て兵を擧げこれに應じて立つたのが楚の遺臣

たる項梁と項羽とである。彼等は江蘇の盱眙に於て楚の懷王を擁立し、更に北上して彭城を都と奠めた。彭縣は今の徐州である。楚と對抗した漢の高祖劉邦も亦徐州に近い沛の出身である。彼の勢力は最初微々たるもので、却つて常に楚に壓せられてゐる有樣であつた。然るに彼が西曆紀元前二〇二年項羽を垓下に圍み遂に烏江の傍に屍を暴さらしめ得たのは實に韓信に負ふ。當時韓信は黃河北部を經略し更に山東を定め、その餘威を驅つて楚を壓したのであつた。かくて北方は漢の統一に依つて南方を制御し得たと評することが出來るであらう。

後漢が滅亡し天下は三分され、津浦沿線も亦魏と吳に依つて境界が劃せられた。その地點は今日の張八嶺附近であつたと思はれる。張八嶺は滁縣の北二つ目の驛で、そこからは浦口迄程遠からず、孫權の帝都たる建康則ち南京は江を渡れば直ちに達し得る地點である。猶又、當時の大立物たる魏の曹操と劉備もその初め津浦沿線と深い關係を持つてゐた。卽ち曹操は先づ兗州の刺史として山東河南に勢力をのばしたのであり、劉備も亦徐州を根據として一時曹操に對抗し、種々の經緯の後遂に蜀漢を創立したのである。

三國の後晋は天下を統一したが、間もなく五胡の中原侵略となり、晋室は遂に江南に遷つて建康に都せざるを得なかつた。以後南北朝を通じて、再び兩者の對立が形成される。西曆紀元三八三年の安徽省肥水の戰は東晋と苻秦との間に行はれたもので、この戰爭に勝利を得た東晋は北方勢力の南進を阻止することが出來たのである。然し未だ積極的に南方勢力が故地を回復し、北方を制御する迄には到らなかつた。

かくて隋・唐の統一に至るまで、南北對立の形勢は解消されなかつたが、それと共に注意しなければならないことは建康を中心とする南方文化が支那に於て愈々壓倒的優位を占める樣になつたことである。上揭の「史記」の記載では未だ文化的には北方に對立し得ざるものであつたが、東晋の建都以來漢人の貴族文明がこの地方の豐富な經濟力と結合してかく華咲くに至つたのである。「南朝四百八十寺、多少の樓臺煙雨の中」などと云ふ有名な詩に依つても推想される如く、當時の南方文化は實に絢爛たるもので、その傾向は隋・唐の統一時代に至るも變らず、その中心點に移動こそあれ、遙か今日に及んでゐる。隋唐時代と云へば當時、揚一と云ふ言葉が行はれ、揚州は首都長安にも勝つた繁華な都會であつた。降つて宋時代には「天上天堂地下蘇杭」の諺もある通り、蘇州・杭州が天下第一の都市として數へられてゐる。それと共に南方が開發された結果、唐代には「江淮の田一たび熟すれば傍ら數道に資す」と云はれ、宋代には「蘇・常熟すれば天下足る」などと云ふ諺も出來た程、南方の農產は豐富となり、北方は到底その比でなくなつた。かくて北方は、當然南方の物資を仰がねばならず、これが運搬のため兩者を結ぶ交通路の整備は必然的要求となつた。それがとりもなほさず、大運河の開鑿であつたのである。

南船北馬の諺にもある通り、水運に惠まれた南方では早くも春秋時代吳王夫差に依つて江と淮とを結ぶ邗溝が開かれた。邗溝とは揚州から淮安に達する運河のことである。降つて隋に至りこの運河開鑿が遂行された。それは文帝に依る邗溝の重修であり、更に煬帝に依つて、汴河を利用し黃河淮河間を結ぶ通濟渠、杭州から蘇州を經て鎭江に達する江南河、及び沁河を利用した汴〔開封〕と涿郡とを結ぶ永濟渠の開設となつたのである。これらは唐・宋時代も使用され穀物を運び人を往來せ

しめ交通に寄與する事絶大であつた。

偖て、隋・唐・宋の首都は何れも黄河中流に位置したのであるが、遼・金以來河北省の薊〔北京〕に政治的中心が移動し、元に依つて現在の北京城の前身たる大都が築城されるや、運河もわざわざ開封を迂回する必要もなくなつた。そこで新たに淮安から徐州の北部を過ぎ、濟寧を經、黄河に達する濟州河、更にそこから聊城を經て臨清に至り舊運河に交はる會通河が開鑿されたのである。これらを結ぶ運河が卽ち杭州を發して天津に達する今日の大運河に外ならない。かくて津浦線が未だ敷設されなかつた時代はこれが南北交通の大動脈として盛んに利用された。當時通州と北京とを結ぶ通惠河も開かれた。元代の運河に就いて、自らこれを利用することの出來たマルコ・ポーロは次の如く記してゐる。

「この運河は揚子江から黄河まで、マンヂからキタイまで、海路を經ず、カンバル〔大都〕までも船舶の航行を自由にさせるために、皇帝が開鑿せしめたもので、幅員も廣く且つ甚だ深い。この壯大なる工事は人をして驚嘆せしめる。そしてその運河を通ぜしめた工事方法とか、或は非常に宏大なものであると云ふ點を歎賞するよりも、その經由する都市や地方に與へた利益と便利とが、實に讚美されなければならない。また運河の兩側には立派で堅固な道路が堤防兼用に築いてあるために、陸上の旅行も亦、舟行と同じ便益を享けてゐるのである。」

ここに記されたマンヂとは蠻子の義で、南宋の領域に屬してゐた南支の人のことを指し、キタイとは契丹のことであるが、ここでは嘗て金の領土に屬してゐた北支人のことを指してゐる。元代の文獻に依ると早く元に服した北方人を漢人と稱し、最後に歸服した南方人を南人と稱して政治上社會上の區別的待遇を行ひ、後者に對しては可成りの壓迫を加へてゐる。かく南方人を蠻子と稱したのは如何なる理由に基づくかは不明である。兎に角南方は古代の南蠻の地で、嘗て中華から輕蔑の眼を以つて見られたのであるから、かかる意味でこの名稱が再び用ひられる樣になつたものに相違ない。

偖て、有史以來南方は絶えず北方から武力的壓迫を受け、中世以來文化が後者を全く凌駕する樣になつても南方勢力に依る支那統一は遂に實現するところとならなかつた。然るに明の太祖朱元璋に至つて從來の慣例を破り南方的勢力が支那を統一することとなつたのである。彼の祖先は沛縣の人で、その父の時、濠州に於て兵を起し、元に對して反旗をひるがへした。太祖は南京を陷入れ更に部將徐達をして北京を奪取し、遂に蒙古を逐ひ、元の社稷を覆したのであつた。濠州とは安徽省鳳陽府で、臨淮關驛からは程遠からず、此處には今日太祖の父の陵墓が存してゐる。明以後を概觀すると清末南方に起つた太平天國の反亂が南方勢力の北上として先づ擧げられるであらう。彼等の破壞は徹底的であつたが、南京占領後、その北上に際しては鳳陽から開封に向つたので津浦沿線は比較的被害は尠かつた。これに反しこの地方は捻匪に依つて莫大な被害を蒙つたのである。但し捻匪は宗教的色彩を帶びる點で、前者と同じであるが、白蓮教匪や義和拳匪と共に北方的動亂であつて、流賊性を帶び未だ滅滿興漢の旗幟を明確にしてはゐない。清の滅亡以後南方的勢力を率ゐて北伐に成功した者は云ふ迄もなく、國民黨軍を統帥した蔣介石に外ならぬ。蓋し、彼が統一事業を一先づ完成するや直ちに國都を南京に遷した事情も亦、明初南京を以つて首都と奠めたのに共通してゐる。

以上南北二勢力の對立とその統一と云ふ觀點から、兩者を結ぶ大動脈津浦沿線の歴史的景觀を試みてみた。蓋し、津浦線の敷設は光緒二十三年〔西曆一八九七〕江蘇候補の容閎が計畫し、初め天津と鎭江とを結ぶ豫定であつた。然るに後に豫定が變更されて、今日の如く天津浦口間となつたのである。敷設に際し外國借款を要したことは勿論で、幾多の經緯があつて、遂に天津韓莊間は獨逸の資本に依り、莊韓浦口間は英國の資本に依ることと決りかくて完通したのは民國元年のことである。これに依つて窺はれる如く、この鐵道たるや山東を根據とする獨逸の勢力の南下と揚子江下流を根據とする英國勢力の北上とに依つて完成したものに外ならない。從つて近代文化の所產たるこの鐵道敷設に際しても外國二勢力の對立がまつはつた譯である。然し津浦鐵道本來の課題はかかる對立に終始するものではなく、南北兩地に於ける文化產業等々の交流統一にあり、換言するならば京津文化と滬寧文化の交流統一こそその使命だと稱し得る。これを如上の歴史景觀と併せ考へるとき、深き示唆を覺えしめるものがあり、更に今次事變の軍事的最高潮點たる徐州會戰に思ひを致すときその感は一層深いものがある。

（筆者は華北交通資業局囑託）

可園雜記

加藤新吉

東京に來て二十日、多くは雨天と曇天、涼しくて助かるが、これでは作物が育つまい。夏は暑かるべく、冬は寒かるべし。夏涼しく、冬暖かくなどと心得違ひの贅澤はいはないことにしたい。

可園よりの音信に、北京は暑氣甚しといふ。今年は閏の六月がある。暑氣は八月まで續くであらう。大陸の凄い驟雨、所謂盆を覆すやうな雨が待たれるであらう。が、それも多過ぎると例の洪水が襲つて來る。

槐の花が咲き蟬の聲が盛になりました。夏の雲が南向の部屋の窓から恰度おあつらへ向きのところに出ました。只今十六時半、室內溫度八十六度、いかにも夏らしい日でございます――と家人は書いてゐる。夏や冬が樂しめるといふことは心境に因るか健康のお蔭か知らぬが、あり難いことである。

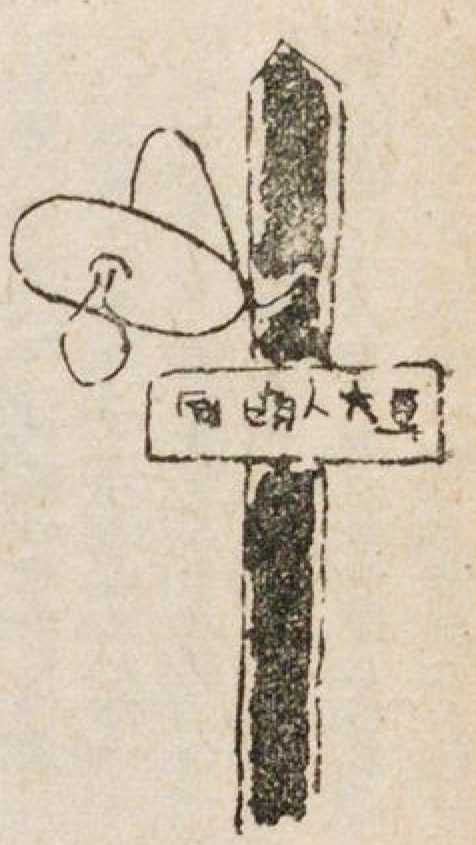
北京では今頃から蚊が殖える、そして暖いままに秋まで居る。日本のやうな蚊遣を焚くかどうか私は知らない。蚊取線香を賣つてゐるからそれは使ふのであらう。人々は夕方になると門戶に腰掛をもち出して涼んでゐる。外も決して涼しいとはいへないが、小さい家の室內よりはましなのであらう。芭蕉の葉で作つた團扇を使ひながら往來で睡る者も多い模樣である。

什刹海は北京の夏だけの遊歩地である。昔の太液池の北に續いて地安門外に在る。今、北海だ中南海だといふ公園が禁苑であつた頃には、ここが市民の唯一の遊歩地であつたといふ。可園からは極く近いので、家人は早速蓮の花を見に行つたと書きよこして居る。その岸に會賢堂といふ料理屋がある。昔、蓮の開花を見に行つた雅客はここで朝食をしたといふ。蓮根、くるみ、杏仁、くわゐなどに氷をかけた夏料理が美味しうございましたとも書いてゐる。そんな手紙を讀むと可園の總菜料理がむやみにたべたくなる。

可園には犬も待つてゐるのである。夕方になりますとフリツガーが自動車の音にとても氣をつけて居りまして中門までとび出して行つては首を長くして居ります。お伴はカナとクラウス、その度毎に隨いて出ます。といふのである。かあいいものだと思ふ。時々夢にも見る。が、それ程に主人を忘れないのに、他所にあげた仔犬がつれられて來たら、みんなで追ひかけていぢめたといふのである。情ないものですと家人はがつかりしてゐる。

仔犬はもう見違へる程大きくなつてゐるであらう。また、いろいろ新しいいたづらを始めてゐるであらう。この頃、院子に水を撒くためにバケツを運んで來ると、それにうつる自分の影を見て、前肢をさし込んで大騷をするのがたまらなくをかしいといふ。月影をとる猿の話を思ひ出させる。

今これを書いてゐるのは山王ホテルの一室。壁には松崎柔父先生の七言絕句、可園雜詠の半切をかけてゐる。今日表裝ができて來た。先生は筆者の恩師。目下可園にお迎して朝夕敎を請ふ幸福を私はもつてゐる。先生並にその詩に就いては近く御紹介もしたいと思ふ。他方の壁には、梅原龍三郎畫伯筆北京風景、これは昨冬畫伯から頂戴して額椽を作らせるために殘して置いたもの。何れも北京を彷彿させるものであり、またやがて可園を飾るべきものである。（七月十八日夜）



北支暢談

康熙帝と科學

我國では最近「科學技術新體制確立要綱」が閣議で決定され、當局の科學への關心が益々高まりつつあるが、近世の統治者中最も科學を愛した者に清朝の康熙帝がある。彼は天性稀に見る好學の人で、啻に支那在來の學術に滿足せず、當時北京に滯在してゐた耶蘇會士について西洋科學の理論以外、「哲學まで熱心に研究し余の疲勞を覺えざるは、その樂しめるが故のみ」と云つてゐる。

又康熙帝はすべて机上の空論を排して實理實學を求めた。そのため支那學の中で最も科學的な宋學を愛し、その精神を汲んで西洋科學を學び、就中數學を第一の基礎學とした。かの回教徒にして支那式天文學の權威者であつた楊光武らの讒訴のために獄死したドイツ人アダム・シヤール（湯若望）に西洋數學の手ほどきをうけ、その後は南懷仁の教授をうけてゐたが、更にフランス・チエスイツト派のブーヴエー（白進）、ジエルビヨン（張誠）スペイン人ベレイラ（徐日昇）、伊太利人グリマルデイ（閔明我）等について專心西洋の數學、物理、天文、砲術を學び長期に亙つて毎日四時間も講義を聞き研究を續けた。そのために滿洲語の教師を彼等につけて覺えさせ、旁々種々の歡待を盡して、彼等の異郷生活を慰めたのである。その後康熙帝は遂に支那自國科學者の參與の下に、不朽の大作「律曆淵源」百卷の編纂に從事し完成したのである。清代における數學の振興は實に康熙帝その人によつて開始されたと云ふべきである。

新線建設

敏速な機動力を基底とする近代戰の遂行に、鐵道が不可缺な要素であることは云ふまでもない。支那事變勃發以來、今日の如く戰果を擴大せしめ得たのは、交通運輸力の整備に負ふところ最も大であるとされてゐる。今日、占領地區域の擴大と事變の長期化に伴つて、鐵道は更に治安の維持、經濟資源の開發の動脈として益々その重要性を加へるに至り、東亞自立經濟確立のため幾多の新線建設が進められてゐる。

事變以來の新設鐵道は既に九百キロを超えた。先づ最初に建設された京古線は約一二六キロ、昭和十二年七月支那事變勃發以來滿支間の交通が俄かに增加したので京山線の輸送力緩和のため建設されたものである。

ついで昭和十三年三月には同蒲線の寧武軒崗間が建設された。事變前この區間のみが同蒲線として未完であつたのだが、わが軍鐵の手によつて初めて同蒲線は完成し、山西省橫斷が可能になつたのである。

十四年五月には京漢線の小冀と隴海線の開封とを結ぶ八七キロの新開線が開通した。この線は鄭州以西の敵ルートに對し軍事上重大なる使命をもつものであり隴海・京漢の兩幹線の連絡線として北支鐵道運營上必要不可缺なものである。昭和十五年七月一日には、包頭の東北大青山炭礦の開發を目的とした包頭——石拐子間三四キロが完成した。同年十一月一日には、同蒲線の東觀より山西省東南部を縱貫、潞安平地の中心潞安に至る一八〇キロが新設された。この線は民國二十一年閻錫山の山西省アウタルキーを目標とする省經濟建設計畫に基き企圖されたことがあり、事變前一部の路盤を築造してゐたと云はれる。本線は最初軍事的要求に基いて建設されたものであるが沿線には十數億噸の石炭を初め、鐵その他の鑛產資源が未開發のまま埋藏されて居り、更に潞安盆地は潞安麻の產地としても人の知るところである。

さらに昨年十一月十五日、京漢線の石門より津浦線の德縣に至る延長一八〇キロの德石線が新設された。本線の建設は清朝末期ドイツ人の手によつて企圖されたもので、以來幾度か提唱計畫されたものである。今次事變後、匪區地帶と化した冀中地區の治安確保が當面の問題となり、他面日本の北支炭への要望は井陘、正豐、磁縣、六河溝炭等の對日輸出量の增大を必要ならしめ、既設の良港青島を利用せしむること等と關聯して本線の建設計畫は俄に具體化し、昭和十五年六月より北支派遣軍の指導下に華北交通會社によつて建設に着手、八路軍の百餘回に及ぶ執拗な妨害襲擊を受け、特に、龍華鎭南方一二キロ附近に於いて壯烈なる戰死を遂げ殉國の華と散つた加藤大尉以下〇〇名の尊き犧牲者を出し乍ら、軍官民の一致協力によつて、資材及び人材

の不足その他の困難を克服し、起工以來僅々五箇月と謂ふ驚異的快記錄を以て開通せしめたものである。その他、事變以來建設されたものは、博山——八陡、門頭溝——大臺、口泉——永定莊、軒崗——石灘、馬頭——西佐、蔣村——史家崗、東大平——赤柴、柳泉——柳泉炭礦など、何れも短距離ではあるが、石炭資源開發に重點を置いたものであり、聖戰四年、凡ゆる困難を排除しつつ、着實に伸展せしめられてゐる。

尙これらの新建設線の外に、目下工事中のもの或は計畫中のものも少くない。その中で特に注目されるのは、四百億トンの埋藏量を有する大同炭の開發運搬を主眼とする同塘線（大同——塘沽間）である。本新線の完成によつて、初めて蒙疆地下資源の對日輸送が本格化されるわけで、我國國防經濟の强化上、劃期的意義を有することとなるのである。

烤羊肉

花屋の店先に菊の花が香をため始めると、そろそろ北京名物の烤羊肉が飯館子の食卓を賑はせる。烤羊肉といふのは、日本で俗に云ふ「ヂンギスカン料理」といつてゐるもので、柔かい羊の肉を獨特の醬油に浸し、四五尺もある大きな鐵架のうへにのせ、松や柳の薪を燃やしながら、燒いて食ふのである。澄みきつた夜空の下、白乾兒をのみながら烤羊肉をつつく風情は捨て難いものだ。この料理は一人で二斤や三斤平げても一向腹にもたれない。肉の乏しい日本では一寸出來ない料理である。北京在住の日本人はこの烤羊肉が大好きだと見え、烤羊肉シーズンになると、どの店も、日本人客で滿員になる。このため回館（回教徒の飯館子）の專門だつたこの料理も近頃では普通の支那飯館子で取扱ふやうになつた。有名な飯館子では、蒙古に「羊圈」といふ自家專用の牧場を有し、仔羊の時分から、特別の注意を拂つて育ててゐる。

八旗と綠營

清朝の八旗軍は太祖奴爾哈赤（ヌルハチ）の定めた兵制の單位固山（グサ）（七千五百人）に基いたもので、固山には最初四種類あり旗色によつて區別されてゐた。後この四旗が正黃・正白・正紅・正藍・鑲黃・鑲白・鑲紅・鑲藍の八旗に增加し今日云ふ八旗軍が組織されたのである。さらにこの八旗には滿洲八旗、蒙古八旗、漢軍八旗の別があつて合計二十四旗、その數二十萬に及んだと云はれる。世祖順治帝が盛京より北京に都するとこの八旗軍も支那本部に入り北京に駐屯する禁旅八旗と國內樞要の地に駐屯する駐防八旗に分たれたのである。この八旗の旗籍にあるものが所謂旗人で、又彼等には生活の基礎として旗地が分給された。

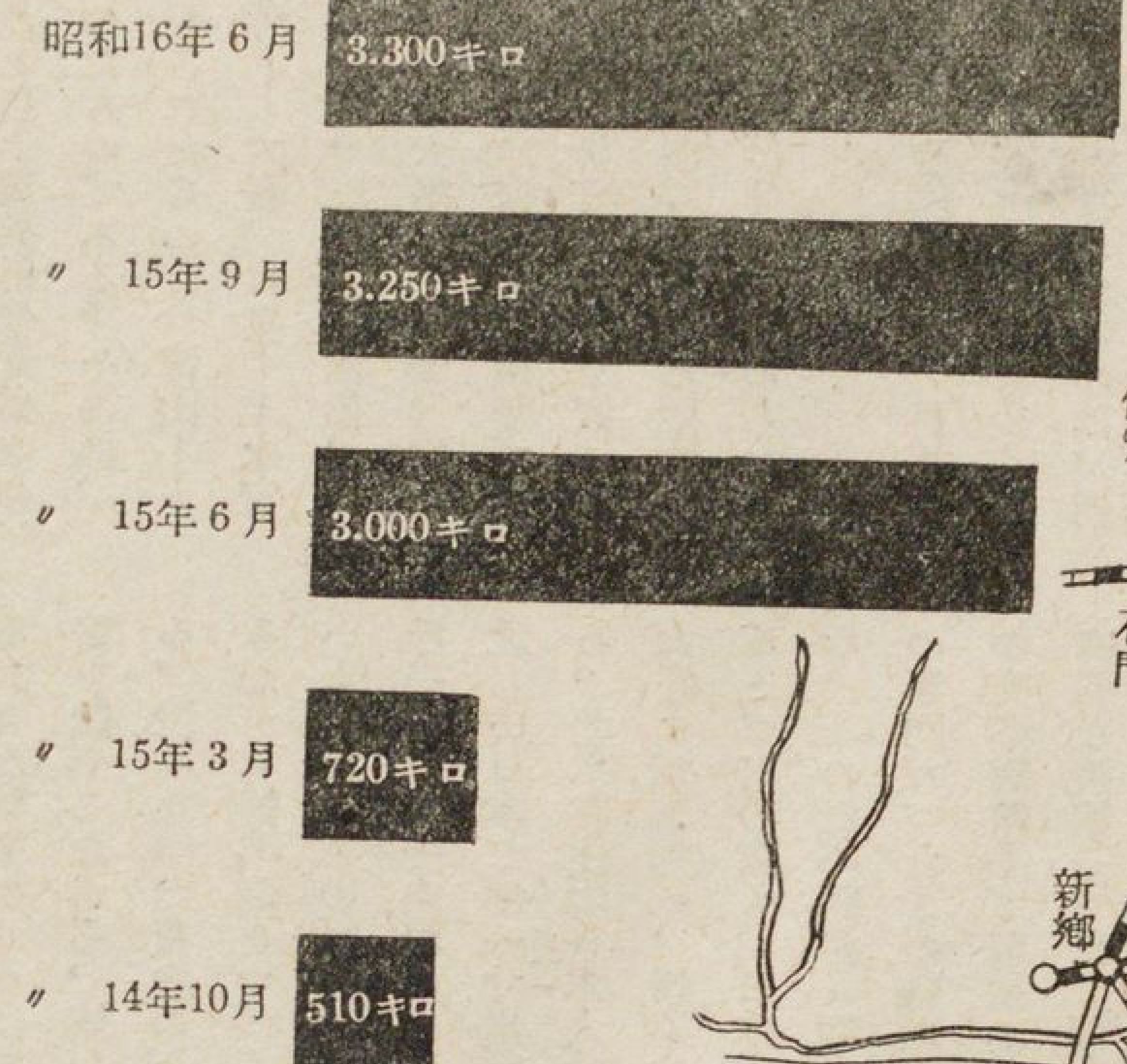
綠營は漢人のみを以つて組織された常備兵で各省に駐防し八旗軍と並んで治安維持に當つた。その旗は綠色で八旗と區別せられた。一營が單位でその定員五百名、綠營の總兵力五十萬といはれてゐた。

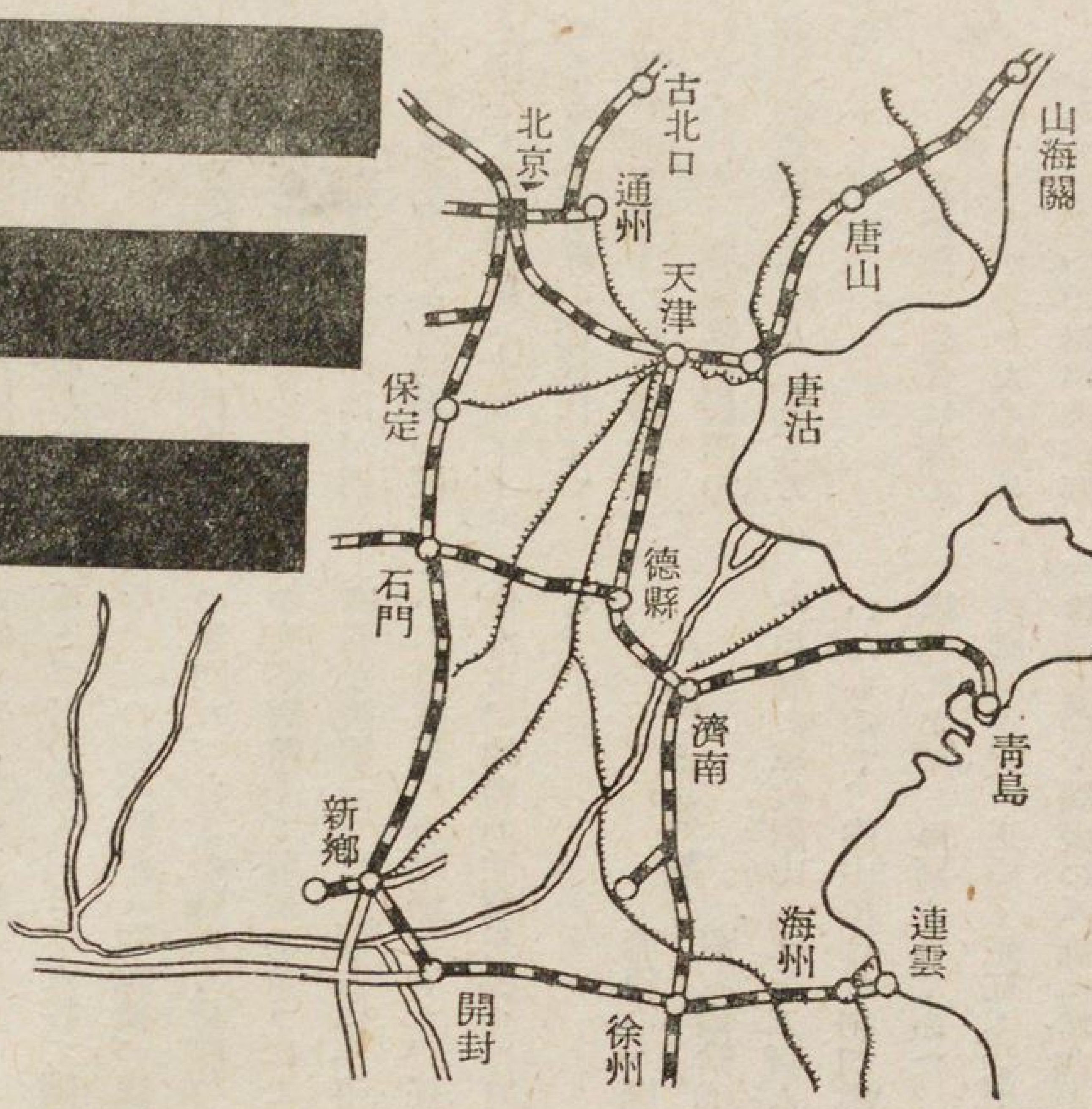
買辦

買辦といふのは支那の事情を知らない外人と支那商人の間の仲介をやるもので、外人は大體この買辦に凡ての實務と大なる權力を與へた。このため彼等は次第に富を貯へて實業家中の有力な分子となり、又支那に於ける主なる資本家として工場や會社の經營を行ふに至つたのである。買辦として最も著名なのは清朝の末期に活躍した伍敦元で、彼は怡和行の首班となつて巨富を積み、當時世界最大の富豪と稱された。

水運

北支・蒙疆の統計 14





昔から中國では南船北馬といはれ、華北に比べて華南は河川の水運が開けてゐるといはれてゐるが、華北にも天津や濟南を中心にして縱橫に開けてゐたのである。

何といつても鐵道、自動車の發達しなかつた十九世紀以前は物資の輸送、人間の移動は水運を最も便利とした。そして今日と雖もなほ重大な役割を有してゐるのである。

事變直前天津の發着貨物が鐵道百九十萬トン・水運によるもの百三十五萬トン、殆んど陸上交通に比肩すると共に陸運との連絡機關として重要な地位を占めてゐることがこの數字によつて窺はれるであらう。

昭和十四年六月天津の英佛租界封鎖に關聯し、天津特三區埠頭外二埠頭の營業開始によつて水運經營に着手した華北交通會社は、逐次經營路線を開拓した。

同年四月には、中國內河航運公會の業務を繼承して河川行政事務を代行することになり、一般民船の統制指導に乘出した。更に同五月からは、從來の汽機船の外に民船による貨物運送を開始、民船千五百隻を動員し數十隻からなる大船團を編成して定期的に運行してゐる。運營路線も急速に伸長し同六月には三千キロを突破した。

又華北交通は、十六年三月、內河水運機械化の第一步を踏み出し、旅客及び曳船用として「瑞祥・瑞雲」の二隻を新造した。

同船は、水流、水深、彎曲等々に船舶設計上、最も惡條件を備へてゐるといはれる華北の內河川に適する樣、同社水運局によつて苦心の末設計されたものである。

何はともあれ、華北交通は交錯する華北河川を通じて國內深く新時代の息吹を傳播せしめ、地方產業の開發と治安の確保を促進してゐる。主なる經營河川は灤河、東北河、北運河、大淸河、子牙河、南運河、黃河、小淸河、大運河、鹽運河などである。

昭和十六年八月「五日印刷納本
昭和十六年九月 一日發 行

九月號
（每月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番町一 長谷川巳之吉
印刷者 小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 大橋松雄
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替東京 六四二二三番
電話九段(33) 一一四一五番 三三四四番

一册定價㊕三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

廣告取扱 大阪市西區京町堀上通一丁目二五
一手取扱所 一新社
電話土佐堀九三九

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十六年八月十五日印刷納本 昭和十六年九月一日發行（毎月一回一日發行）第二十八號

北支 定價三十錢